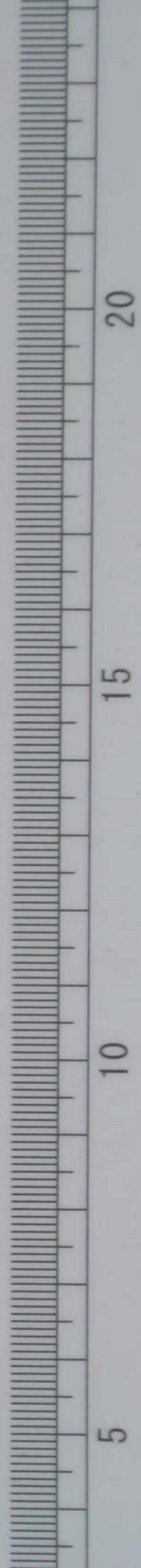


LICENSED PRODUCT
3/Color
White
Magenta
Red
Yellow
Green
Cyan
Blue
Black



KIRI·NO·HANA.



桐の花

抒情歌集





KIRI·NO·HANA.

桐の花

抒情歌集

大正三年三月
江崎
吉十

4

30

35

40

45

50

55

60



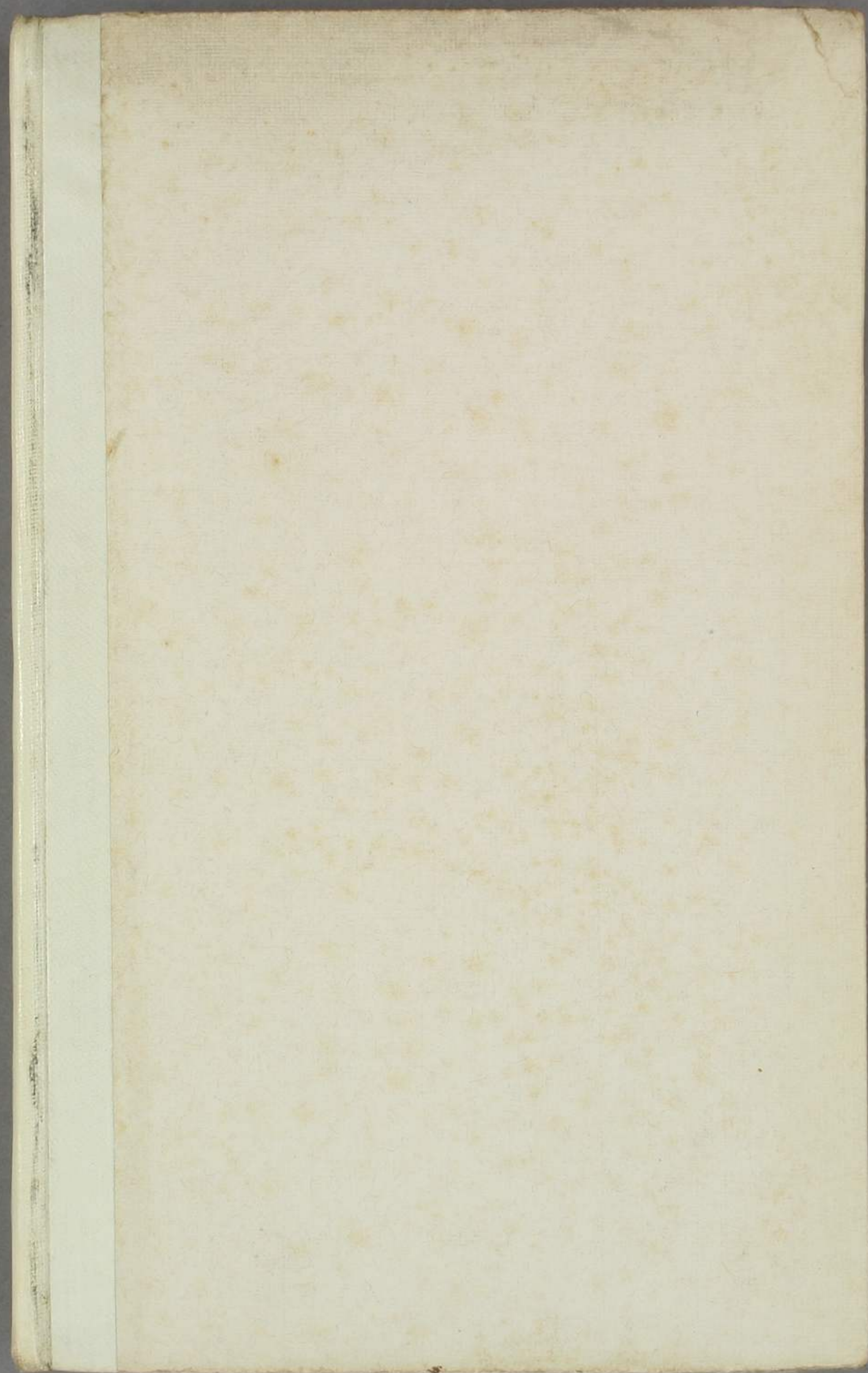
花の桐

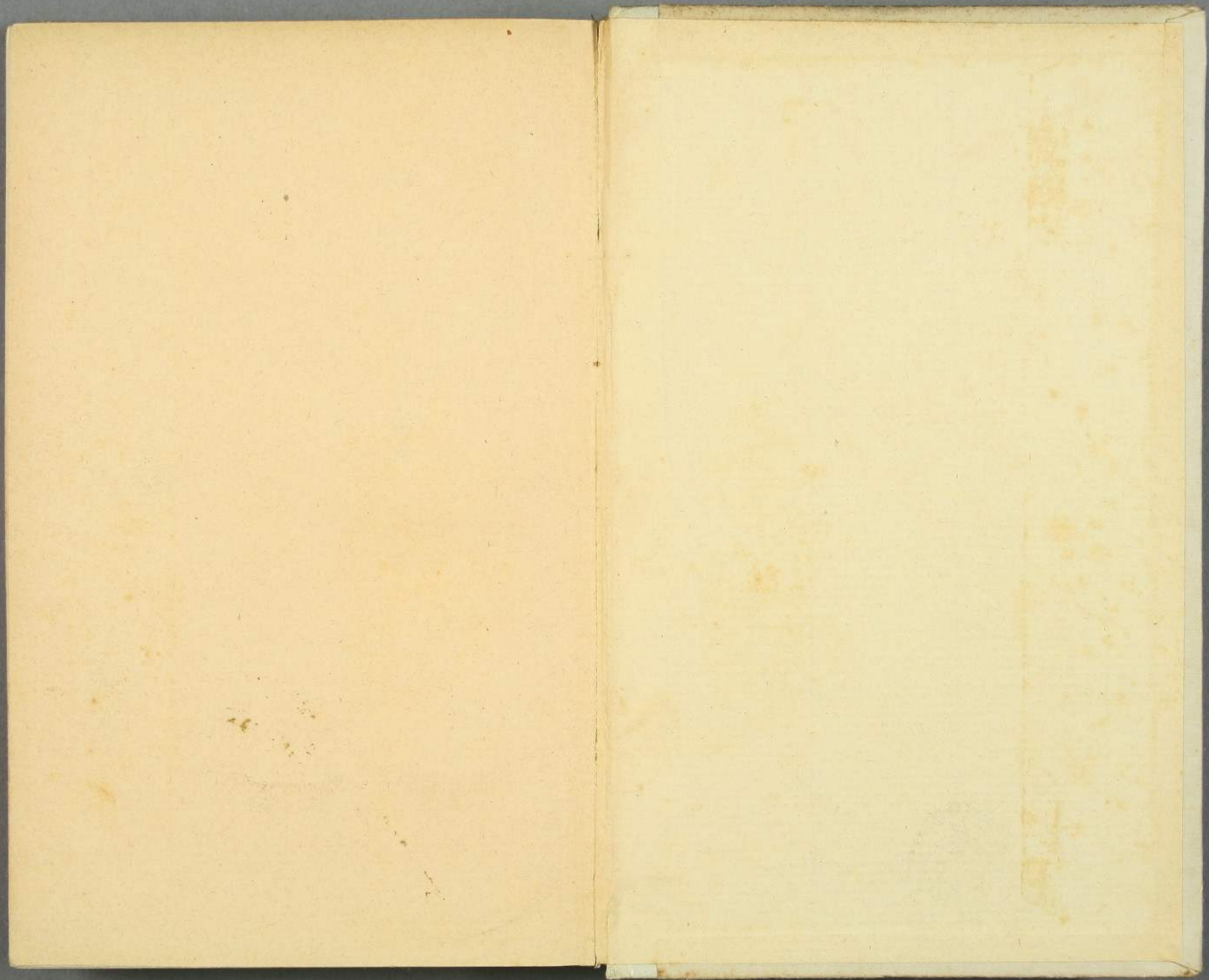
著

秋白原北

抒情歌集

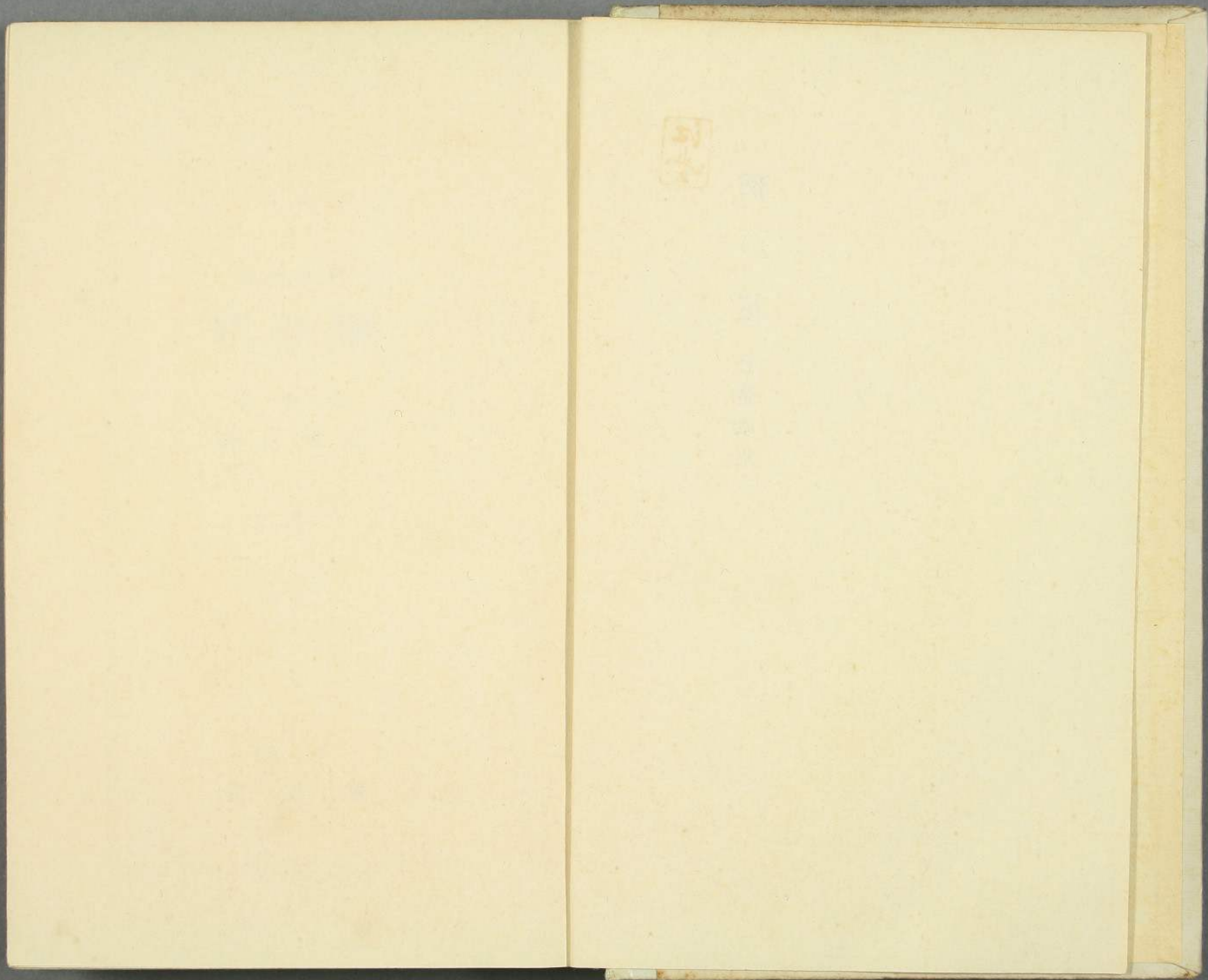
京東
堂雲東







桐
の
花
抒情歌集



集歌情抒
花の桐

畫及著
秋白原北



京東
堂雲東

わがこの哀れなる抒情歌集を誰にかは献げむ
はらからよわが友よ忘れえぬ人びとよ
凡てこれわかき日のいさほしき夢のきれはし

Tonka John



ラテスカと花の桐

27.V.10

桐の花とカステラの時季となつた。私は何時も桐の花が咲くと冷めた
吹笛フエイトの哀音を思ひ出す。五月がきて東京の西洋料理店レストランの階上にさはや
かな夏帽子の淡青い麥稈のほひが染みわたるころになると、妙にカス
テラが粉つぼく見えてくる。さうして若い客人のまへに食卓の上の薄い

フラスコの水にちらつく桐の花の淡紫色とその暖味のある新しい黄色さがよく調和して、晩春と初夏とのやはらかい氣息のアレンジメントをしみじみと感ぜしめる。私にはそのばさばさしてどこか手さはりの澁いカステラがかかる場合何より好ましく味はれるのである。粉っぽい新らしさ、タツチのフレッシュな印象、實際さじ觸つて見ても懐かしいではないか。同じ黄色な菓子でも餡のやうに滑つすべこいのはぬめぬめした油繪や水で洗ひあげたやうな水彩畫と同様に近代人の繊細な感覺に快い反應を起しうる事は到底不可能である。

新様の佛蘭西藝術のなつかしさはその品の高い鋭敏な新らしいタツチの面白さにある。一寸觸つても指に付いてくる六月の棕櫚の花粉のやうに、月夜の温室の薄い硝子のなかに、絶えず淡緑の細花を顫はせてゐるキンギン草のやうに、うら若い女の肌の弾力のある軟味に冷々こにじみいつる夏の目の冷めたい汗のやうに、近代人の神經は痛いほど常に顫へて居らねばならぬ。私はそんな風に感じたいのである。

*

短歌は一箇の小さい緑の古寶玉である、古い悲哀時代のセンチメント

の精^{エツキス}である。古いけれども棄てがたい、その完成した美しくい形は東洋人の二千年來の悲哀のさまざまな追憶^{おもひで}に依てたどへがたない悲しい光澤をつけられてゐる。その面には玉蟲のやうな光やつつましい杏仁水のやうな匂乃至一絃琴や古い日本の笛のやうな素朴な^{こころ}のリズムが動いてゐる。なつかしいではないか、若いロセツチが生命の家のよろこびを古いソネットの形式に寄せたやうに私も奔放自由なシムフォニーの新曲に自己の全感覺を響かすあとから、寥しい一絃の古琴を新らしい悲しい指ささきでここちよく爪弾したところで少しも差支へはない筈だ。

市井の俗人すらその忙がしい銀行事務の折々には一鉢のシネラリヤの花になにとはなきデリケエトな目ざしを送ることもあるではないか。私はそんな風に短歌の匂に親しみたいのである。

*

その小さい緑の古寶玉はよく香料のうつり香の新しい汗のにじんだ私の掌にも載り、ウイスキイや黄色いカステラの付いた指のさきにも觸れる。而して時と處と私の氣分の相違により、ある時は桐の花の淡い匂を反射し、また草わかばの淡緑にも映り、或はあるかなさかの刺のあとか

ら赤い血の一滴をすら點せられる。

私は無論この古寶玉の優しい觸感を愛してゐる。而已ならず近代の新しいそして繊細な五官の汗と静ころなき青年の濃かな氣息に依て染々とした特殊の光澤を附加へたいのである。併し私はその完成された形の放つ深い悲哀を知つてゐる。實際完成されたものほごかなしいものはあるまい、四十過ぎた世帯くづしの仲居が時折わかい半玉のやうなデリケエトな目つきするほごさびしく見られるものはない。わかい人のころはもつと複雑かぎりなき未成の音樂に憧がれてゐる。マネにゆき、ドガ

にゆき、ゴオガンにゆき、アンドレエフにゆき、シユラトウス、ボオドレエル、ロオデンバツハの感覺と形式にゆく。かの小さな綠玉の古色は私がそれらの強烈な色彩の歡樂に疲れたとき、やるせない魂の餘韻を時としてしんみりと指の間から通はすだけの事である。即かりそめの病に飲む一杯の古いシャンペンの味である。

*

私の哀しい Nostalgia がまた一絃の古琴にたまたま微かな月光の如くつかすはなれず付纏ふ時に、ある若い人達の集團はこれを唯一の樂器と

して、行往座臥、凡ての清新な情緒センチメントと凡ての苦い神経の悦樂とを委ねて満足してゐる。新人の悲哀は古い詠嘆の絃にのぼせて象徴の世界を觀照すべくあまりに複雑であり深刻であり而かも而かも傷ましいほど痛烈である、わが友よ、古い器樂の悲哀を知れ。さうしてその幽かな哀調の色に執し過ぎて些かだにその至醇なる謙讓の美德を傷つくるな。

ある時はビーヤホールのかたかげにその慎しい音色を懐かしむこともある。しかし私には白晝夏の光のふりそそぐ日比谷公園の音樂堂の上上に、凡ての満足と充實した凡ての生の歡喜とを以てその古琴獨奏の矜

を衆人の目前に曝すだけの勇氣はない。そはあまりに無慘である。新人よ、汝の意の趣くままに、汝の心境の移りゆくままに、ある時は新しい戯曲に、小説に、パントマイムに、秋の日はかないロマンスに、太掉に、匈牙利古曲に、ピアノソロに、或は管絃樂オケストラの高き調にゆき、銀笛を吹き、道化た面して弄玩品の鐵琴をもちたたけ。さうして時々その古い一絃の古琴のうへに疲れたる汝の柔軟かな白い手をさしのべよ。遊び盡くした小鳥の日暮れて古巢の梢にかへるやうに、日光と快樂とに倦んだ心のさみしい燈心草の陰影をもとめるやうに。

古い小さい緑玉エメラルドは水晶の函に入れて戟刺の鋭い洋酒やハシツシユの罍*のうしろにそつと秘藏して置くべきものだ。古い一絃琴は佛蘭西わたりのピアノの傍の薄青い陰影のなかにたてかけて、おほかたは静かに眺め入るべきものである。私は短歌をそんな風に考へてゐる。
さうして眞に愛してゐる。

私の詩が色彩の強い印象派の油繪ならば私の歌はその裏面にかすかに

動いてゐるテレピン油のしめりであらねばならぬ。その寂しい濕潤うるほひが私のこころの小さい古寶玉の緑であり一絃琴の瀟洒な啜り泣である。
私の新しいデリケートな素朴でソフトな官能の餘韻はこの古い本來の哀調の面目を傷けぬほどの弱さに常に顫へて居らねばならぬ。
而してしみじみと桐の花の哀亮をそへカステラの粉つばい觸感を加へて見たいのである。

單なる純情詩の時代は過ぎた。私らはシムブルな情緒そのものを素朴

な古人のやうに詠歎することに最早や少からぬ不満足を感じる。赤子の如く凡てをフレツシユに感ずる心はまた品の高い文明人の濫いアートに醇化されねばならぬ。私は涙を惜しむ。何らの修飾なく聲あげて泣く人の悲哀より一木一草の感覺にも靜かに涙さしぐむ品格のゆかしさが一段と懐しいではないか。實際、思ふままのこころを擧げてうちつけに搔き口説くよりも、私はじつと握りしめた指さきの微細な觸感にやるせない片戀の思をしみじみと通はせたいのである。

鳴かぬ小鳥のさびしさ……それは私の歌を作るとき唯一無二の氣

分である。私には鳴いてる小鳥のしらべよりもその小鳥をそそのかして鳴かしめるまでにいたる周囲のなんどなき空氣の促へがたい色やにほひがなつかしいのだ、さらにまだ鳴きいでぬ小鳥鳴きやんだ小鳥の幽かな月光と草木の陰影のなかに、ほのかな遠くの櫛の花の甘い臭に刺戟されてじつと自分の悲哀を凝視めながら、細くて赤い嘴を顫してゐる氣分が何に代へても哀ふかく感じられる。私は如何なるものにも風情ある空氣の微動が欲しい。そのなかに桐の花の色もちらつかせ、カステラの手さほりも匂はせたいのである。

私の歌にも欲するところは氣分である、陰影である、なつかしい情調の吐息である。……*

(小さい藍色の毛蟲が黄色な花粉にまみれて冷めたい亞鉛のベンチに匍つてゐる……)

私は歌を愛してゐる。さうしてその淡綠色の小さい毛蟲のやうにしみじみとの私の氣分にまみれて、拙いながら眞に感じた自分の歌を作つて

ゆく……

*

五月が過ぎ、六月が来て私らの皮膚に柔軟やはらかなネルのほひがやや熱く感じられるころとなれば、西洋料理店の白いテエブルクロスの上にも紫の釣鐘草と苦い珈琲の時季が来る。

私はこのいつもの詩のやうになつた *Flower* を植物園の長い薄あかりのなかていまやつと書き了へたところだ。



銀笛哀慕調

一 春

一

春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外さの面もの草
に日の入る夕

二

銀笛のごとも哀しく單調に過ぎもゆきにし夢
 なりしかな
 しみじみと物のあはれを知るほどの少女となりし君とわかれぬ

五

いやはてに鬱金ざくらのかなしみのちりそめ
 ぬれば五月はきたる
 葉がくれに青き果を見るかなしみか花ちりし
 日のわが思ひ出か

六

ヒヤシンス薄紫に咲きにけりはじめて心顫ひ
そめし日

七

かくまでも黒くかなしき色やあるわが思ふひ
この春のまなざし
君を見てびやうのやなぎ薫るごとき胸むねさわぎ
をばおぼえそめにき

八

南風モウバツサンがをみな子のふくら脛吹く
よき愁吹く

南風薔薇ゆすれりあるかなく斑猫飛びて死ぬ
る夕ぐれ

九

凋れゆく高き花の香身に染みつ貧しき街の春
の夜の月

寝てきけば春夜のむせび泣くごとしスレート
屋根に月の光れる

十一

ゆく春のなやみに堪へで
鶯も草にねむれり

たんぽぽに誰がさし置きし三すぢほご日に光
るなり春の三味線

十二

ゆく水に赤き日のさし水ぐるま春の川瀬にや
ますめぐるも

白き犬水に飛び入るうつくしさ鳥鳴く鳥鳴く
春の川瀬に



十三

一匙ひとさじのココアココアのにはひなつかしく訪おとぎふ身みとは
知らしたまはじ

黒耀くろぎやうの石いしの釦たんをつまさぐりかたらふひまも物
をこそおもへ

薄あかき爪のうるみにひとしづく落ちしミル
クもなつかしと見ぬ

寂しき日赤き酒取りさりげなく強ひたまふに
ぞ涙ながれぬ

十四

あまりりす息もふかげに燃ゆるときふと唇は
さしあてしかな

くれなるのにくき唇あまりりすつき放しつ
君をこそおもへ

十五

はるすぎてうらわかぐさのなやみよりもえい
 づるはなのあかきときめき
 くさばなのあかきふかみにおさへあへぬくら
 づけのおとのたへがたきかな

わかきひのもののおいきのそこここにあかき
 はなさくしづこころなし

ゆふぐれのとりのつめたるもやのうちしづか
 にひとのなくねきこゆる

十六

浅草にて

ゆく春の喇叭の囃子身にぞ染む造花ちる雨の
日の暮

ああ笛鳴る思ひいづるはパノラマの巴里の空
の春の夜の月

十七

美しくしき「夜」の横顔を見るごとく遠き街見て心
ひかれぬ

薄暮の水路に似たる心ありやはらかき夢のひ
とりながるる



十八

そぞろあるき煙草くゆらすつかのまも哀かなしか
らずやわかきラムボオ

けふもまた泣かまほしさに街まちにいで泣かまほ
しさに街よりかへる

やはらかきかなしみきたるジンの酒とりてふ
くめばかなしみきたる

ナイフとりフオクとる間もやはらかに涙なが
れしわれならなくに

にほやかに女の獨唱ソの沈みゆくこちにかな
し春も暮るれば

ウイスキーの強くかなしき口あたりそれにも
優まして春の暮れゆく

十九

夜會のあこ

かくまでも心のこるはなにならむ紅あかき薔さう薇びか
酒かそなたか

二十

春日笛のごさし

すすろかにクラリネットの鳴りやまぬ日の夕
ぐれどなりにけるかな

にほやかにトロムボーンの音は鳴りぬ君と歩
みしあとの思ひ出

II 夏

郷里柳河に歸りてうたへる歌

一

廢れたる園に踏み入りたんぽぽの白きを踏め
ば春たけにける

二

夕暮はへりオトロウブ、
そこまなく南かぜふく

やはらかに髪かきわけてふりそそぐ香料のご
と^し滲みるゆめかも

三

哀調一首

きりはたりはたりちやうちやう血の色の棺^{かひ}衣^ぎ
織^{はた}るとか悲しき機^{はた}よ

四

ロンドンの悲しき言葉耳にあり花赤ければ命
 短し
 いと高き君がよき名ぞ忍ばるる赤きロンドン
 赤きロンドン

狂ほしく髪かきむしり晝ひねもすロンドンの
 紅をひとり凝視むる
 縫針の娘たれかれおとなしくロンドンの花を
 踏みて歸るも

ロンドンは松葉牡丹の柳河語なり



五

枇杷の木に黄なる枇杷の實かがやくとわれ驚
きて飛びくつがへる

枇杷の實をかるくおとせば吾^わ弟^{あに}らが麥藁帽に
うけてけるかな

六

ケエツガリのあたまに火の點いた、
潜うんだら消えた

吾弟らは鴉のよき巢をかなしむと夕かたまけ
てさやぎいでつも

六

Gonshan, Gonshan, 何處へいた、
きのふ札所の巡禮に

馬鈴薯の花咲き穂麥あからみぬあひびきのご
と岡をのぼれば



黒鶉^{くろつぐみ}野邊にさへづり唐^{たう}辛^{がら}子^しいまし花さく君は
いづこに

燕^{つばき}コツキリコ、哇^{あざみち}道^{みち}やギリコ

病める兒はハモニカを吹き夜に入りぬもろこ
し畑^{はた}の黄なる月の出

III 秋

一

人のこひしき
日の光金^{カネ}絲^{イト}雀^{スズメ}のごとく
顛^カふとき
硝子^{カサ}に凭^よれば

二

啄木鳥つきの木つつき了おへて去りし時黄なる夕日
に音ねを絶ちしとき

雲あかく日の入る夕木き々ぎの實の吐息きにうもれ
鳴く鳥もあり

三

あかあかと五重の塔に入日さしかたかげの闇
をちやるめらのゆく

かかる時地獄を思ふ、君去りて雲あかき野邊に
煙渦まく

IV 冬

一

十一月北國の旅にて三首

葦崎の白きペンキの驛標に薄日のしみて光る
さみしさ

柿の赤き實、旅の男が氣まぐれに泣きて去いにき
と人に語るな

たはれめが青き眼鏡のうしろより朝の寒いを透
かすまなざし

二

久留米旅情の歌

日も暮れて櫛はじの實採とりのかへるころ廓くらわの裏をゆ
けばかなしき

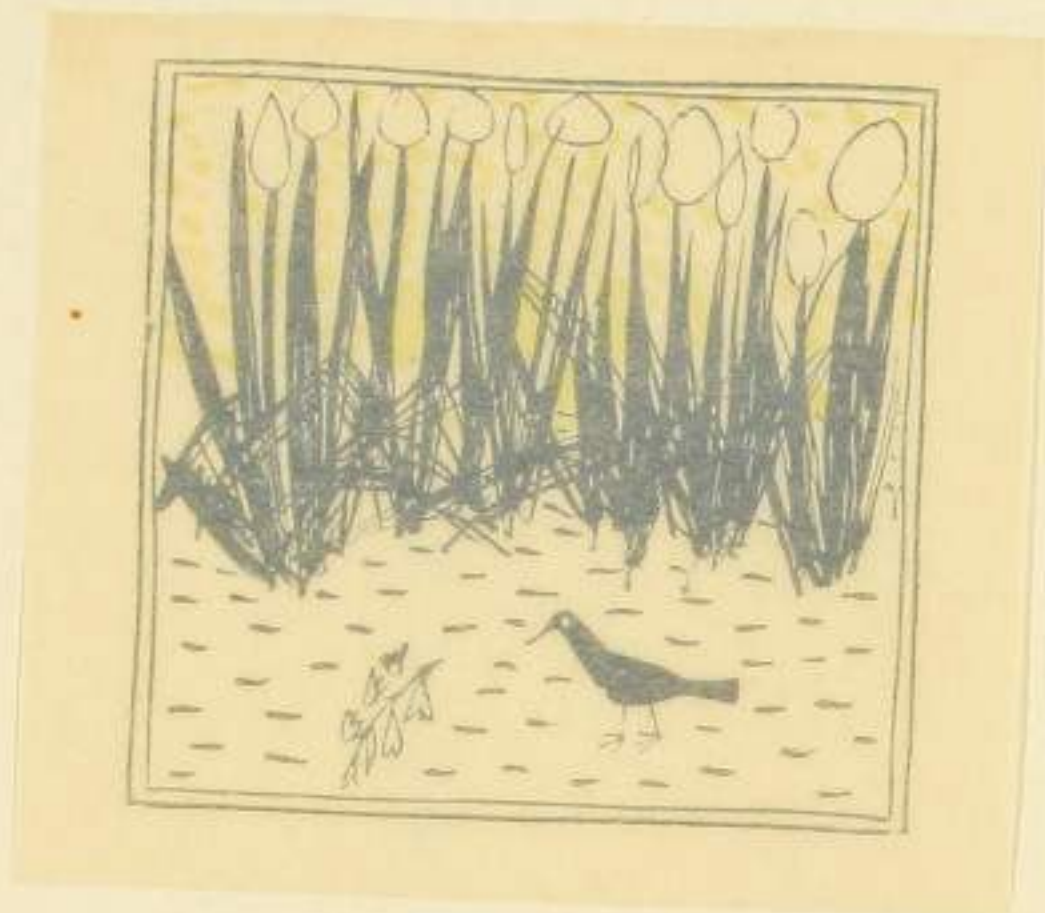
三

猫やなぎ薄紫に光りつつ暮れゆく人はしづか
 にあゆむ
 水面^{みづ}ゆく櫂^かのしづくよ雪あかり漕げば河風身
 に染みわたる

四

雪のふる夜昔ながらの蠟燭の裸火にうつ
 し出されし團藏の仁木の凄さよ

わが友は仁木の顔に面^{おもて}あかりさしつけながら
 花道をゆく



春晚夏初

I 公園のひごとき

—

手にとれば桐の反射の薄青き新聞紙こそ泣か
まほしけれ

二

山羊の乳と山椒のしめりまじりたるそよ風吹
いて夏は來りぬ

指さきのあるかなきかの青き傷それにも夏は
染みて光りぬ

三

草わかば黄なる小犬の飛び跳ねて走り去りけ
り微風の中

草わかば踏めば身も世も黄に染みぬ西洋辛子
の粉を花はふり撒く

こころもち黄なる花粉のこぼれたる薄地のセ
ルのなで肩のひと

草に寝ころべ、草に寝ころべ

草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝
て削るなり

四

夕されば棕櫚の花ぶさ黄に光る公園の外に座
る琴弾者

II 郊外

一

田舎の家に中風病みのわが小父が赤き花見る春
の夕暮

二

きさくなる 蜜蜂飼養者が赤帯の露西亞の地主
に似たる初夏

あまつさへ赤き花ちり小馬嘶く農家の白日に
なげき入りぬる

三

ほそぼそと出臍の小兒笛を吹く紫蘇の畑の春
のゆふぐれ

太葱の一莖ごとに蜻蛉るてなにか恐るるあか
き夕暮



III 庭園の食卓

青き果のかげにわれらが食卓をしつらへよ、
春を惜むわかき日のこころよ

一

あひびきの朝な夕なにちりそめし爵^う金^{こん}ざくら
の花ならなくに

二

サラダとり白きソースをかけてましき
春の思ひ出のため

さくらんぼいまださ青に光るこそ悲しかりけ
れ花ちりしのち

三

青き果^みのかげに椅子よせ春の日を友と惜めば
薄雲のゆく

酒^つ注げば黄なる薄雲桐の木の間に見えて
夏は來にけり

四

かなしげに春の小鳥も啼き過ぎぬ赤きセエリ
 一を君と鳴らさむ

燕つばめ、春のセエリ一のいと赤きさくらんぼ啣くはえ
 飛びさりにけり

五

ああ五月さつき螢せう匍はひいでヂキタリスち小さき鈴かねふる
 たましひの泣く

金口きんぐちの露西亞煙草のけむりよりなほゆるやか
 に燃ゆるわが戀

六

やはらかに誰が喫^のみさしし珈琲^コぞ紫の吐息ゆ
るくのぼれる

よき椅子^{いす}に黒き猫さへ来てなげく初夏晩春の
濃きココアかな

七

蟾蜍^{ヒキガヘ}が出て来た皆で寄つてたかつて胡椒
をふりかけたり、スープを飲ませたりした

しろがねの小さき匙もて蟾蜍^{ヒキガヘ}スープ啜^くるもさ
みしきがため

八

干葡萄ひそり摘み取りかみくだく食後のほご
をおもひさびしむ

カステラの黄なるやはらみ新らしき味ひもよ
し春の暮れゆく

九

晝餐^{ひるげ}ごきはてしさびしさ春の日も紅茶のいろ
に沈みそめつつ

まひる野の玉葱の花紫蘇の花かるく哀^{かな}しみ君
ごわかるる

IV 春の名残

一

一九一〇暮春三崎の海邊にて

いつしかに春の名残となり
にけり昆布干場の
たんぽぽの花

95

寝てよめば黄なる粉こなつく小さき字のロチイな
つかしたんぼほの花

春愁極りなし

野薊あざみに觸さわれば指ゆびやや痛いたし汐見てあればすこし
眼まなこいたし

洋妾らしやめんの長ながき湯浴ゆあみをかいま見る黄なる戸外とぐらの燕つばき
のむれ

ふはふはとたんぼほの飛びあかあかと夕日の
光り人の歩める

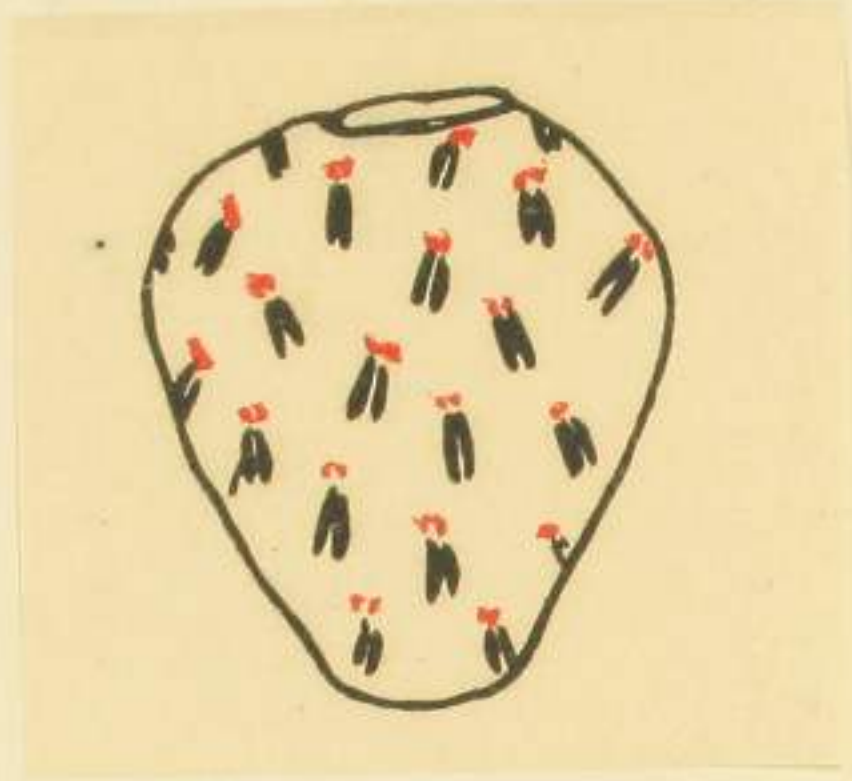
三

乳のみ兒の肌のさはりか三さんの絃いとなするひびき
か春はるのくれゆく

魔法つかひ鈴すず振ふ花はなの内うち部に泣なく心地こそすれ
春の日はゆく

四

「春」はまたさんぼがへりをする兒らの悲しき頬
のみ見つつかへるや



思の晝



六月が来た、なつかしい紫のデキタリスと苦い珈琲の時節、赤い土耳
古帽の螢が萎え、憂鬱な心の蟾蜍^{かへろ}がかやつり草の陰影^{かげ}から啼き出す季節
——而してやや蒸し暑くなつたセルのきもの肌觸りさへまだ何となく
棄て難い今日此頃の氣情^{けだ}るい快さに、ふつくらと軽いソファに身を投げ
かけて、物憂げに煙草をくゆらし、女を思ひ、温かい吐息と、眞晝マダ

ネシヤの幻光の中に幽かな黄昏の思想を慕ひ恍惚ツワイライトの薄明を待つわかい男の心ほご惱ましいものはあるまい。

零時二十三分、日の光はヴェニス模様の色硝子を透かして窓掛の浮織を惱まし、人も居ない珈琲店の空椅子には、今恰度眞白な猫がまるで乳酪かたまりの塊のやうにとろみかけてゐる。而して誰が喫みさしたのか、眩ばゆい食卓の一角から軟らかな珈琲の吐息がたちのぼる。

珈琲、珈琲、ひとりでにわれとわが心の匂を温め乍ら、やはらかな紫

のいろにたちのぼるその吐息、病ましい物思の何とも捉へどころのないやうなその香煙の纏れを、懈怠なまけた身の起伏おきふに何といふこともなく眺めやる晝の男の心持、また逃げてゆく「時」のうしろでをも恍惚うつろと空に凝視みつむる心持……

ゴッホの狂ほしい外光の痛さ、ゴウガンの粗あらい生そのものの調色、或はマチスやピガソ、物を角に見るキュピストの新らしい神経の觸覺よりもかういふ日の疎うそましい懈怠なまけもの心にはあのルノワアルなどのふくよかな色の温味と惱ましい息づかひの魅力、さうしたものの美しさがどれ

だけ豊醇な親しさと懐かしさをおぼえさせてくれるか知れない。

珈琲の煙はまだ消えもやらずにたちのぼる。やや疲れたらしいやうな
ロオデンバツハの物おもひ、美しい寶石商人の溜息、ポオドレルの苦
笑ひ、或はレニエ、サマンの曇りと優しみ、それらを一つにしてたちの
ぼるわが珈琲の匂の強さ、なつかしさ、心もとなさ、苛々しさ……何よ
りも藝術の粹を慕ふ私の心は渾然としたその悲念の溶ましさに譯もなく
苛められ、魅せられ、ひき包まれ、はたまた泣かされる。さてはあの怪
しい沈黙の秒刻に譬へやうもない靈魂の戯戯をかりそめにも聴き逃さな

かつたヴェルレエヌの純一な氣分も恰度デリケートなかういふ心持では
無かつたか。

珈琲の煙はごりもなほさず心の言葉である。匂である。色であり音楽で
ある。而して澁くて苦い珈琲末は心の心、靈魂の生地。匙は感覺。凡て溶
かして掻き廻す觀相の餘裕から初めてごりあつめた哀樂のかけひなたが
軟かな思の吐息となつてたちのぼる。もの思はしい中に限りもない色と
香の諸相をひき包んで六月の光線に美しい媚のあや糸を縛らす苦い珈琲
の風味は決して自己を忘れたロマンチックな空の幻でも單純な甘いセン

チメントの歎きでもない。眞實、珈琲から珈琲の煙が立つやうに内心の深みから素直に心の吐息を搔き立たせてその融合渾沌のさかひに怪しい藝術の矜持と魔力とを物靜かに薫らし得る純一な詩人の歡會はまた何にもかへがたい眞言秘密の妙諦である。世に天才の名を恣にする人達の間にも眞にわが靈の匂を知り、言葉のかげひなた、ものの媚、色あひ、幽かな色觸香響の末の末まで嗅ぎわけて常に怪しい悲念にかき暮れ得る高貴な心の所有者は極めて少い。況して世のつねのかいなでびとが心をや。藝苑の中にしてなほ荒削りの珈琲末を悦び、但しは心と言葉の距離徒に

遠くしてそのみなもとの苦き香氣を忘れたつやもない思想家と偽りもの
の工人の世には多さよ。

珈琲、珈琲、珈琲の煙はまだ冷めもやらずにたちのぼる。紫いろの息
づかひ、ロダンの線畫……

乳酪の猫がまだ夢みるやうにその光つた尻尾の尖の細かな緑色の痙攣
を凝視めてゐる。窖のやうな入口からくわつと明るく銀座の通が見え
る、白日の輝き、濡れた舗石、柳の葉、そのかげの赤い草花の鉢、寄せ
かけた自轉車の銀の輪……

目に見えぬ空の何處かで花火が揚る。

そのうちにやや陰影の曇りを煙らした室内の光に懶怠けはてた私の物思が今はもう珈琲の匂にさへ堪へがたいほどの疲れをおぼえる。而してただそこはかどなくアンダンテの夢の調子に墮ちてゆく。

私は思ふ、男をんなの夏の中夜の秘戯をかういふ晝の惱ましさにかろく描きつづけてゐた歌麿の氣持、まだ暮れもやらぬ晝の舞臺に黄色いラムプを點す若い女形の心持、白芥子の花に纏る晝の幽霊、投げやりな晝間の三味線、湯上りの肌匂に匂ふあかい石竹、而して白日の光にうち揚ぐる

夜の花火の紅緑・翡翠・土耳其玉・銀光の紫……目に見えぬ星と寶玉の一悲劇、眩耀と消滅の夢。

而してまた公園の晝のアーケ燈を、白晝のシネマトグラフの瞬き、或は薄い面纱のかけに仄かに霞む人妻の愁はしい春の素顔を。

總じて明るい中の物の瞬き、幽愁の燼し、疲勞と陰影の薄笑ひ、眩暈中の杏仁水、それらから來る寂しさ、悲しさ、なつかしさ、さうした優しさ果敢なさ溶ましが私にはあの悲み極まつた純情の嗚咽、あらゆる觀念の寂び、綺羅を鏤めた美しい夜の横顔、或はサロメ女王の驕奢を盡

した踊の手さばきよりも却て染々とした歎息の推移を感じしめる。

涙を惜め、涙を惜め、高品なわかい心のそこひもわかぬ胸の秘奥に啜り泣けよ。芭蕉の寂びはまだうら若い私達が落ちつくところではない、少くとも世を楽しむメエテルリンクの悲愁と神秘な蒼い陰影の靄の中に寂しい心の在所を探す物馴れぬ Stranger の心持、その心を私は慕ふ。

乳酪の白い猫が幽かに甦をかきはじめた。その時私も静かに女を呼んで一杯のウオツカを求める。この晝の暑さに無色透明なウオツカが小さ

なりキユグラスを透かして冷たい漣を立てる。その投影がまたプリズムのやうに、頁を開いてあるモウパッサン集の黒い活字に細々と果敢ない染色をちらつかす。

ふと點の赤い i の字がひとつ眼につく。それが物憂げに動いて上の行の Chambre の b の字に匍ひ出し、しんみりと蒼い光を立てて斜めに Les enfants の L を横ざり、もひとつ上の行の Passion の P に喰ひつくやうに留まつた。螢だ、疲れた小さな螢、點の赤い i の字、その尻を抓むと力のない人靈色の燐光が怪しい濕潤を放つ。私は何時しか幼い少

年の日の心に歌つた「おもひで」のあの螢の一聯を思ひ出した。

そなたの首は骨牌の

赤いチャツクの帽子かな、

光ることもなきその尻は

感冒のこころにはの青し、

しをれはてたる幽霊か。

透き徹つたウオツカと螢の赤い點、その冷たさ惱ましき、私は染々と
晝の螢に執着する。而してその銀の燵しをかけた蒼白い哀傷の光を愛す
る。

業平の高い調はまさに感じ易い夜の螢のセンチメントである。私達は
時としてその繊細な平安朝の詠嘆、乃至は純情の雅びやかなる啜り泣き、
若くは都鳥の哀怨調に同じ麗らかな心の共鳴を見出す事はある、而しな
ほ苦い近代の藝術にはまだその上に堪へがたいセンチユアルな日光の觸
覺と澁い神経の瞬きとを必要とする。鍍銀の晝の燵しを必要とする。さ
もなくばアーク燈の眩ぶしい光のかげにあるかなきかに飛ぶ夜の螢の燐
光を闇の夜のそれよりも更に哀れぶかくやるせないものに感じなければ
ならないのである。

午後二時過ぎ、螢はいつのまにか珈琲碗のかげにかくれて白い頁の Passion の P の字のみが強く強く光り出した。

乳酪の白猫がまだ睡つてゐる。晝寝から覺めた料理人が今また青い甘藍の球でも搦ぎとるのか厨の方で新らしい野菜のにはひがすすろぐ。さうして水道栓の水の滴り、誰かしら吹き鳴らす晝の銀笛……

私の氣まぐれな聯想はまた鮮な郊外の景色に手を振つてゆく郵便脚夫の白い帽子に飛んでゆく。ゴツホの野外の景色、段々畑の銀綠色に雨の

霽れ間の郭公が啼き叫び、白い葱の花のかげから出臍の兒が裸のままに笛を吹く……

凡ての因襲から放れ、馴れ過ぎた官能の愛着を断ちきり、而して更に新らしい驚異の銳感にやるせなきわれ自らの靈を慄かす近代の心にもなほありしそのままの聲音に郭公は啼き、寂しい日本の笛は鳴る。ただ感ずる詩人の觸覺と、周圍の氣分の如何に依て古くも珍らしくも聴き做されるのである。

笛は鳴る、夜の笛より晝の音色のわびしさを、公卿の物の哀れよりも

彌さらに病兒の温かいその吐息を、私の神経は悲しむ、而して葱のあた
まに縛るる白い羽蟲のやうに羽ばたく。

笛の音は何時の世までも滅びない、日本の笛の哀れさも何時の如何な
る人の心にも染み込んでゆく。その笛本來の幽かな弱い寂しさは誰しも
の胸の中に生れながらに秘められた純情のなげきである。高貴な内心の
啜り泣き、やがては奔放限りなき管絃樂のそのみなもとである。

そのみなもとを悲しめ、而して至醇なそのみなもとの歌の氣稟をかり
そのめにも傷くるな、笛の匂を知れ、完成された大和歌の心根に更に悲し

い銀光の燦しをかけよ。ただ懐かしいその笛に強ひては殘虐な煤煙の濁
りと工場の鐵の響を吹きかけるな。

私はただ馴れ過ぎた俗人ブルジョアの詠歎を忘む。されば日本の笛を取る心もち
にもなほ鮮かな *Stranger* の驚異と感觸を貴み、目白僧園の鐘の音にア
ベマリヤの晚鐘を忍ぶ以太利亞旅人の春愁を悟り、異國の菊の香かなりに新ら
しい流離の涙をそそぐピエルロチが秋の心をまたとなく懐かしむ。私は
また梅の木に鳴く鶯よりも脳病院の窓に鳴く鶯に泣き、定齋の軋みに驚
く鶯に連れて驚く。有明の月に血を吐くほととぎすの悲歎を曾て見知ら

ぬ私は寧ろキャベツ畑の雨に啼く郭公を楽しいものに哀れみ、昔ながらの古い前栽の繁みに飛ぶ螢よりも客待の人力車のかげに仄かに蒼白いお尻のバツチを光らす東京の螢をこの上なく今の心に親しむ。さりながら凡ての因襲から逃れて常に新らしい官能の薄明りにわれどわが靈の在所をたづねゆくわかい旅人の心にも思ひ棄てがたきは日本の笛のあはれである。哀みのそのみなもと、純情のかの吐息である。

時が経つた。いつしか黄ばみかけた日の光のもとに、薄青いクローバ

模様の壁にかけた玩具の木時計が可笑しさうにお尻の分銅を動かして乍ら今三時を点つ。而して驚かされた乳酪の塊が椅子の上からすべり下り、料理人が細かに玉葱の庖丁を刻み、懶けたソファの物思が軟かに温かい欠伸をつく。

くわつとした入口の外の明るさ、自轉車が去り、草花の赤い鉢に静かに煉瓦屋根の投影が軽い塵埃と纏れる。

Cuckoo, jug-jug, pu-we, to-witta-woo!

Gristchen, gristchen, tutch, tutch, tutch!

鳥屋が通る、くわつと明るい人道を車を曳いて。

Cuckoo, jug-jug, pu-we, to-witta-woo!

車の上の圓い四角な金網作りの、或は竹製の、大小さまざまの鳥籠、その鳥籠が六月の日に揺られながら蒸しかへるやうに光つてゆく。

Cuckoo, jug-jug, pu-we, to-witta-woo!

Gristchen, gristchen, tutch, tutch, tutch!



時の明薄

美しくしきかなしき痛き放埒の薄らあかりに堪へぬころか

一 放埒

二

ものづかれそのやはらかき青縞のふらんねる
 きてなげくわが戀
 わがゆめはおいらん草ささの香のごとし雨ふれば
 濡れ風吹けばちる

三

鳴きしきるは葦きり舌うつは海うみさるにて
 もせんや夜の明けがたのつれびき

アーク燈あかり點ともれるかげをあるかなし螢の飛ぶは
 あはれなるかな

四

なんぼ戀には身が細ろ、
ふたへの帯が三重まはる

なにとなく軍鶏しゃもの啼く夜の月あかりいぶかし
みつつ立てる女か

五

博多帯しめ筑前しほり筑前博多の
帯しめて、あゆむ姿は柳腰……

すつきりと筑前博多の帯をしめ忍び來し夜の
白ゆりの花

六

ぬば玉の銀杏がへしの君がたば美しくし黒し蓮
の花さく

七

ある遊女の部屋に、薄い硝子の水盤があつた。
夏の夕方、夜のひきあけ、ひけすぎの薄いあか
りにほのかにウオタアヒヤシンスの花が咲
いてはまた萎れてゆくのであつた

水盤の水にひたれるヒヤシンスほのかに咲き
て物思はする

フラスコに青きリキュールさしよせて寝れば
 よしなや月さしにけり
 二上りの宵のながしをききしよりすて身のわ
 れとなりにつむかも

八



九

毒草なれどもその花がすかに、
光あれどもその色さびし

雪の下白く小さく咲きにけり喜蝶が部屋の箱
庭の山

十

わかき身の感じ易さよ硝子杯の薄き罍にも心
染みつつ

顔へ易く傷つき易き心あり薄らあかりにちる
花もあり

十一

鳥よ、鳥よ、宿場の小鳥、
廣重の海に飛べよ

木の枝に青き小鳥のとまりゐてただほればれ
と鳴ける品川

十二

年増のなげき一首

玉蟲の一羽ひこは光りて飛びゆけるその空ながめを
んな寝そべる

が
む
れ
惱
ま
し
く
廻ま
り
梯はし
子ご
を
く
だ
り
ゆ
く
春
の
夕
の
踊
子

一

II
踊
子

二

やるせなき春のワルツの舞すがた哀しくるほ
し君の踊れる

美しくきさいへかなしく愚かしき疲れつくる
と踊子踊る

紫のいたましままで一人踊るスカートひざりの陰影かげ
に春はくれゆく

ただ飛び跳ね踊れ踊子現身うらみの沓くつのつまさき春
暮れむとす

三

たらんてら踊りつくして疲れ伏す深むらさき
のびろうごの椅子
あでやかに踊りつかれしさみしさか寝椅子に
人を待てるころか

四

くろんぼが泣かむばかりに飛び跳ぬる尻ふり
踊にしくものはなし

III 浅き浮名

一

戀すてふ浅き浮名もかにかくに立てばなつか
し白芥子の花

二

薄青きセルの單衣ひきえをつけそめしそのころのご
 となつかしきひと
 片戀のわれかな身かなやはらかにネルは着れ
 ども物おもへども

三

茴香うんきやうさく

わが世さびし身丈みぢおなじき茴香うんきやうも薄黄に花の
 咲きそめにけり

茴香の花の中ゆき君の泣くかはたれごきのこ
 こちこそすれ

四

白き藤椅子をふたつよせてものおもふ
ひさのおだやかさよ。読みさせるはアル
ペエル・サマンにや、やはらかに物優しき
夕なりけり

さしむかひ二人暮れゆく夏の日のかはたれの
空に桐の匂へる

五

潮來出島の眞菰の中にあやめ
咲くさはしほらしや

かきつばた男ならずばたをやかにひとり身投
げて死なましものを

六

たんだ振れふれ六尺袖を

桐の花ことにかはゆき半玉の泣かまほしさに
あゆむ雨かな

七

すすかけの木さあかしやさあかしやの
木さすすかけさ舗石みちのうす霧に

ほのぼのさ人をたづねてゆく朝はあかしやの
木にふる雨もがな

IV 蟾蜍の時

一

螢飛び蟾蜍啼くなりおづおづと忍び逢ふ夜の
薄霧の中



二

蟾ひきがへる 幽霊のごと啼けるあり人よほのかに歩み
かへさめ

ゆくりなくかかるなげきをきくものか月蒼ざ
めて西よりのぼる

155

三

鳥羽玉の夜のみそかごと悲しむと密かに墓も
啼けるならじか

寶玉のこよなき心とり落しよきひと泣けば墓
もまた啼く

四

いかばかり麻の畑の青き葉の身には染むらむ
人妻の泣く

人知れず忍ぶ心は鳥羽玉の黒き夜のごとかが
やきいでぬ

青柿のかの柿の木に小夜ふけて白き猫ゐるひ
もじきかもよ

一

V 猫と河豚と

二

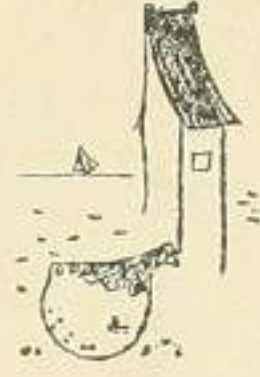
白き猫膝に抱けばわがおもひ音なく暮れて病
むここちする

白き猫泣かむばかりに春ゆくと締しめつゆるめ
つ物をこそおもへ

三

弓矢八幡寝はせれど寝たこ
おしやらばなとせうぞの

夜おそくかけしふすまに匍ひのぼる黒きけも
ののけはひこそすれ



四

乳^{にゅうりよく}緑^{りよく}のびろうごの河^か豚^ぐ責^せめふくらし昨^{きの}日^のも男^{おとこ}
涙^{なみだ}ながしき

河^か豚^ぐよ河^か豚^ぐよ汝^{なれ}は愚^{おろ}かし地^ちに跳^はねて沖^{おき}津^つ玉^{たま}藻^も
の香^{かほ}のなげきする

いそいそと 廣告燈も廻るなり 春のみやこのあ
ひびきの時

春

Ⅴ 路上

夏

白耳義新詩人のものなやみは静かにし
てあたたかく芭蕉の寂はほのかに涼し

かはたれのロウデンバツハ芥子の花ほのかに
過ぎし夏はなつかし

水路

空見れば圓弧燈アークライトに雪のごと羽蟲たかれり春よ
いづこに

薄暮かたの水路すゐろにうつるむらさきの弧燈この春の愁
なるらむ

新橋

新らしき匂なによりいとかなし勸工場のぞく
 五月のころ
 人力車の提灯かんたん点つけて客待つとならぶ河邊に螢
 飛びいづ

銀座

薄あかり紅かみきダリヤを襟にさし絹帽シルクハットの老いか
 がみゆく

夏よ夏よ鳳仙花ちらし走りゆく人力車夫にし
 ばしかがやけ

おそ夏

折ふしのものの流行ハヤのなつかしくかなしけれ
ばぞ夏もいぬめる



兩國

萬歡夢のごとし

青玉のしだれ花火のちりか
かり消ゆる路上を
君よいそがむ

初秋

夏の夜の牡丹燈籠の薄あかり
新三郎を誰か殺
せる

ちりからご硝子問屋の燈籠の塵埃ほこ
うごかし秋
風の吹く



きさごあの雨

I 雨のあとさき

一

新らしき野菜畑のほととぎす背廣着て啼け雨
の霽^はれ間^まを

キヤベツの段々^{だんぐはたけ}畑銀緑なり雨霽れ空に白雲の
湧く

あまつさへキヤベツかがやく畑遠く郵便脚夫
疲れくる見ゆ

入目うくるだらだら坂のなかほどの釣鐘草の
黄なるかがやき

窓ぎはの男の頬のみ明^{あか}う見せ釣鐘草の中を汽
車ゆく

三

酒場の夏

夏帽子潇洒につけて身をやつす若き紳士の白百合の花

四

夏の日はなつかしきかなこころよく梔子ゆずりの花の汗もちてちる

きりぎりすよき淫たはれ女めがひとり寝て氷食む日となりなりにけるかな

五

やるせなき淫^{みだ}ら心となりけり
棕^せ栢^{ぼく}の花咲き
身^みさへ肥^か満^みれば

黒^{くろ}き猫^{ねこ}夜^よは狂^{くる}ほしくかき
いだき五月^ご蠅^ばきもの
に晝^{ひる}は跳^はねやる

六

桐の花ちるころ

人妻^{ひとつま}のすこし汗^{あせ}ばみ乳^{ちち}をしぼる
硝^び子^こ杯^{ばい}のふち
のなつかしきかな

七

梅雨くるまへ

栗の花四十路過ぎたる髪結の日暮はいかにさ
びしかるらむ

八

あかしやの花ふり落す月は來ぬ東京の雨わた
くしの雨

検温器けんおんきかけてさみしく涙ぐむ薄き肌あり梅雨つゆ
盡きずふる

二階より桐の青き葉見てありぬ雨ふる街の四
十路そぢの女

七月やおかめいんこ鸚哥いんこの啼き叫ぶ妾宅の屋根の草
に雨ふる

色硝子暮れてなまめく町の湯の窓の下もとなるど
くだみの花

湯上りの好すいた娘がふくよかに足の爪き剪る石
竹の花

十

長雨の蒼くさみしく淫れてしその日かの日も
いまは戀しき

長雨のあとのこころにひるがへり孔雀火のご
と鳴く日きたりぬ

十一

新らしき皮膚の痛みかたましひの心の汗より
來るなげきか

たもちがたきこころとこころ薄ら青き蝗のご
とく弾ねてなげくや

十二

憎きは女、戀しきもまた女

憎悪にくしみのこころ夏より秋にかけ
苗香の花の咲く
もあはれや

十三

晝見えぬ星のこころよなつかしく刈りし穂に
凭り人もねむりぬ

あかあかとあひる鶯卵を置いてゆく草場のかげの夏
の日の戀

十四

夏の日は女役者のものごしのなまめかしさに
 似てさびしけれ
 紫の日傘さしかけ憂うき人ののらりしやらりと
 歩む夕ぐれ

十五

やはらかに夏のおもひも老いゆきぬ中年の日
 の君がまなざし

II 晝の鈴蟲

明治四十四年の夏、蠟殼町の岩佐病院にて

その日

なつかしき七月二日^{ふつか}しみじみとメスのわが背^せ
に觸れしその夏

麻酔のまへ

麻酔の前鈴蟲鳴けり窓邊には紅く小さき朝顔
のさく

麻酔の時

夏はさびしコロコロホルムに痺れゆくわがここ
ろにも啼ける鈴蟲

朝顔を紅く小さしと見つるいのち消えむとぞ
する鳴け鳴け鈴蟲

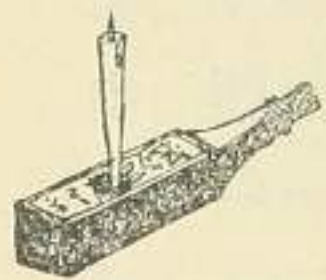
麻醉のあと

燕^{つばめ}、燕^{つばめ}、晝の麻醉のさめがたに宙がへりして啼く
はさびしも

午前午後

氣のふれし女^{をんな}寡^{なや}婦^めのいと蒼くしまりなき眸^めに
朝顔のさく

創^{きず}いたしかなし鋭^{きり}しまたさびし狂^{きやう}人^{びと}の部屋に
啼ける鈴蟲



夕ぐれ

ほのかなる水くだもののにほひにもかなしや
心疲れむとする

さしのぞけば向ふの寄席よせに人形の治兵衛踊れ
りなんとせうぞの

宵のくち

なにおもふわかき看護婦夏過ぎて雨夜あまよの空に
花火あがれる

宵のくちそれもひととき看護婦のはるもにか
吹く夏もひととき

立秋

退院の前の日

長廊下いろ薄黄なる水薬の瓶ひとつ持ち秋は
來にけり



章五思秋

I 秋のおとづれ

一

松脂のほひのごとく新らしくなげく心に秋
はきたりぬ

二

薄らかに紅く孱弱し鳳仙花人力車の輪にちる
はいそがし

鳳仙花うまれて啼ける犬ころの薄き皮膚より
秋立ちにけり

三

秋の空酒を顰めて飲む人の青き額に顫ひそめぬる

眼のふかく晝も臆する男あり光れる秋をちつと凝視むる

四

鏽銀しやうぎんの蠅取蜘蛛をまづ活かし秋はさやかに光
りそめぬる

君がピンするごとに青き蟲を刺すその冷ひやたさを
晝も感ずる

五

かかる日の胸のいたみのしくしくと空に光り
て雨ふるらむか

しづやかに光の雨のふりそそぐ晝の心に蒼さ
めてあり



II 秋思

一

クリスチナ・ロセチが頭巾かぶせまし秋のはじめの母の横顔

二

食堂の黄なる硝子をさしのぞく山羊の眼のご
と秋はなつかし

三

秋の草白き石^{しゃ}^{はん}の泡つぶのけはひ幽かに花つ
けてけり

人形の秋の素肌となりぬべき白き菊こそ哀^{かな}し
かりけれ

四

旅に來て船がかりする思あり寶石商の霧の夜の月

五

みすすかかる信濃か日本アルプスが空のあなたに雪の光れる

静かなる秋のけはひのつかれより櫻の霜葉ちりそめにけむ



III 清元

一

清元の新らしき撥君が撥あまりに冴えて痛き
夜は來ぬ

二

手の指をそろへてつよくそりかへす薄らあか
 りのものつれづれ
 ひいやりと剃刀かみそりひとつ落ちてあり鶏頭の花黄
 なる庭さき

三

微かすかにも光る蟲あり三味線の弾きすてられし
 こまのほとりに

蟋蟀いせざならばひとり鳴きてもありぬべしひとり
 鳴きても夜は明けぬべし

四

圓喬のするりと羽織すべらするかろき手つき
 にこほろぎの鳴く
 太棹たさざのびんと鳴りたる手元より夜のかなしみ
 や眼をあけにけむ

昇菊の絃のつよさよ

黒き猫しづかに歩みさりにけり昇菊の絃いんぎ切れ
 したまゆら

きりきりと切れし二の絃いんぎつぎ合せ締むるここ
 ろか秋のをはりに

五

歌舞伎座十月狂言所見

常盤津の連^{つれ}弾^{びき}の撥いちやうに白く光りて夜の
ふけにけり

IV 百舌の高音

一

百舌啼けば紺の腹掛新らしきわかき大工も涙
ながしぬ

二

いらいらと葱の畑をゆくときの心ぼそさや百
舌啼きしきる

いつのまに刈り干しにけむ甘蔗たうきみ刈り干しに
けむあはれ百舌啼く

三

とある池のほとりにて

水すまし夕日光ればしみじみと跳はねてつるめ
り秋の水面みづに

四

鶏頭の血のしたたれる廐うまやにも秋のあはれの見
ゆる汽車みち

三月まへ穂麥のびたる畑なりきいま血のごと
く鶏頭の咲く

五

柔かき光の中にあをあをと脚ふるはして啼く
蟲もあり

かかれとて蟲の寡婦あもかは啼かざらむ鴉細こまかに啄
みにけり

六

武藏野のだんだん畑の唐辛子いまあかあかと
刈り干しにけれ

あかあかと胡椒刈り干せとめどなく涙ながる
る胡椒刈り干せ

父親とその子の三次ひと日赤く胡椒刈り干せ
ど物言はずけり

男子らは心しくしく墾畑きりばたの赤き胡椒を刈り干
しつくす

V 街の晩秋

一

黄なる日に鏽びし姿^{すがた}見鏡^{かがみ}てりかへし人あらな
くに百舌啼きしきる

二

秋の葉

いつのまに黄なる火となりちりにけむ青さい
かちの小さき葉のゆめ



四

都大路いまだゆらげる橡こらの葉に日向雨こそふ
りいでにけれ

午前八時すすかけの木のかげはしる電車の霜
もなつかしきかな

五

あかしやの金さ赤さがちるぞえな、
やはらかな秋の光にちるぞえな

ただしづかに金きんのよき葉のちりかへりいかば
かり秋はかなしかるらむ

六
わが友の黒く光れる瞳より恐ろしきなし秋ふ
けわたる





品小園物植

25. III. 10.

午後三時過ぎ、

薄黄水仙の浅葱あさぎの新芽枯れたる芝生のなかに仕切られたる圓形或は長
方形の花壇のなかに二寸ばかり崩えいづ。その幾何學的なる配列のつづ
ましさよ、風微かすかにかよふ。

水噴かぬ鏽びたる噴水の露盤より静かに滴る水滴。

温室前の厚葉シユロランの高きそよぎ。キミガヨランの長きしだり葉に日は光り、南洋土人の頭飾の如くにうち動く。

植物園事務室より出で来りし、若き紳士の紺の背廣に赤皮の靴のやはらかなる、薄黄水仙のほつりをぞゆく。

異國の人來る。男は萌黄のソフトをかぶり、女は褪紅の外套を着け、その後より鮮紅の帽かむりし二人の男女の小兒爽やかに走りゆく。轉づるは French か、角ぐみそめし櫻の二列の並木の間の人道を、枯草の邊

りを、青くして低きかなめ垣の長き徑に添ひて、ハリエニシダの花黄なる彼方へとぞゆく。日は黄にして軟かく、冷めたけれども快よき春の風吹く。

とある枯れたる芝生の隅に整はぬ圓形を作りあまたの迎春花ワウバイの小さくして色黄なる花葉もなき枯枝に咲けり、高さは人の足もとにうち見らる。砂敷ける徑のほつり沈丁の花冷めたき風に甘く鋭し。

少年二人カンヴスを手にさげて静心なく歩みゆく、濡れたる油繪具のほひ新し。

老綠色の小さき園標に記したる白き文字の淡青さよ。『このおくの下に庭あり』。

暗くして青きインバネスのマワシの下に冷めたく白き指のみ見せて黄なる密柑をむきつつ我はゆく……

枝ぶりよきサンシユユの花の小さくして黄なる數かざりなき哀愁よ、四時過ぎの日光をうけて風に戦げる。

人ごるきこゆ、女のやさしき砂を踏む足音も……

色淡き、あるは華美なる羽織のちりめんのしとやかさよ、女の一人は

淡青のリボンをぞ髪につけたる。

サンシユユと徑を隔てて向へるツタウルシの木の小さき黄なる花、その枝に毛蟲の繭ひとつ透きて見ゆ。

遠き下町の夕とごろき、豆腐屋のラツバ、長く曳く小さき汽笛、鐵板の音。

小鳥ちろちろと鳴く。

濡れる粉つぼくして赤みある黒き土のそこそここに、枯れたる小草の淡き淡き乳黄色と、そのなかに萌えいでたる葱色の草わかばの新しき配

調を見よ。佛蘭西がへりの若紳士の軽く着けたる粹な背廣のにはひする。

丁字形の白ペンキの二尺ばかりの立標に、M.C.と小さき横文字にて書きたる、そのつつましさは淡紫の花をすりつけて過ぎしは誰ぞ。

日の光は形圓きトベラノキに遮られて空氣冷やかに風うすく匂ひくねれるサンザシに淡紅緑の芽は蕾み、そのもどに水仙の芽ぞ寸ばかり地を抽きてうち戦ぐ。こある小枝に寥しくして忙しき小さき白粉色の蜘蛛のおこなひよ、その絲の色なき戦慄……

銃の音一二發——

眼をあげよ、今、くわつと明りし二本の楠の梢を、サンシユユの黄なる花の光を、枯草の色を、淡青きヒヤシンスの芽のにはひを。

そこらに聲したる人もはや去りぬ。
鳥は園の周圍に鳴き、園丁の鍬に掘りかへさるる赤土のやはらかなるあるかなきかの濕潤のなかのわかき新芽のにはひよ、冷めたけれども力り。

老綠色の足もとの小さき園標は日にそのさみしき半面をあてたる。そ

の淡青き白き文字のかすかなる黄なる反射よ。園内の草は自生といへども摘み取るべからず』云云。

橡の枯木のもとに書架を立てたる青年書家は静物の硝子杯と皿と水さしと醋ゆき林檎とを描きくづしたる古カンブスの上に、まづ新しき樹の幹の White 〃 Blue 〃 を塗りはじめたる。すでに暮りそめたる夕日は彼の男の描けるサンシユの黄なる枝の花に、そを見る齒痛の人の顔一面に巻きつけたる白き繻帯に、わがむく密柑の皮の黄橙色にさみしく光りつつあり。わが歩みは檜の日かげより丘のはづれの小亭へ、その傍

の徑を下りて睡蓮科の生ひ涵れる小さき池のほごりへゆく。

日の光はここにて淡き黄緑となり、冷たくして透明なる水は薄らに顛へ、汚なるココア色の泥のなかに蠢めく蟲ありて、水草のかげに油すこし浮く。そのうへに八つ手のやはらかなる乳金色の花穂はこの小さな領内にうらわかき貴公子の如く佇めり。

三分のち、われはまた廣き池のほごりの老緑色のベンチに腰かく。園丁來りて踏板の上に並べほしたる靴ぬぎの汚れたる毛をはたく、チヨコレートの如き埃立つ。

ここをまた密柑むきつつ日かげを厭ひて我はゆく……

Tobacco と白く抜ける煙草の赤き紙標見ゆ、敷島を買はんとて寥しき
賣店に入るほどの饑ゑたる心と、ひとりあるきのなにとはなき哀愁に、
日も暮れんとするさみしさよ。

また小亭のベンチの老緑色のつつましまでのなつかしさに一人ゆき
て休憩みたる十分ほどの静けさは獨身のわかき男ならでは味ひ知らぬ憂
愁の境ぞかし。この間に華美なる姿して金縁の眼鏡かけたる Blue-Stock-
ing の輩二人三人淡紅の梅花のものをゆく。肉色のクリームの如き梅の

花は厭ふべし。かのわかき女の冷めたき白齒と、はしたなき English の
會話とはここに興なし。我はただ花下の若草の上を日光の匍ひ來りてか
なたの小さきベンチの脚に射せる淡黄緑のあるかなきかのかげのみを見
つめたり。

マチ擦れば火は風に消えて巻煙草のけむり一すぢのぼるほどにさみし
き鐘は鳴る——盲啞院晚響の鐘。

小石踏みつつ後を通る紳士の右の手にもてる新聞紙の包はや薄青し。
太く、細き汽笛……新築中の槌の音……街の小兒らの聲……わが遂に

歩み入る竹林の青さ、日かげは灑されて新しく、わがインパネスに、ノートの罫に、徑を超えて空木の幹にて衰へ、キンギンボク、毒ウツギの青き葉は暮れやらぬ陰影のなかにありて、小砂利のあかりに鋭く嘆く。猫柳のぼやぼやは銀紫にして、その下の癢れたる池の面には沈まんとする太陽の半圓浮び、そが黄にして赤き光薄れ揺らぎつつ青みを帯べる銀の冷たさに擴がる。

豆腐イ……豆腐イ……

テウテ胡桃の淡紫の幹——坂をのぼりきりたるところより貯藏庫（柑

子類の植物を入れたる）の煉瓦壁見ゆ。何時も何時もわが歩みの目標となる軟かなるその壁の色はまだ芽にいでぬ薬草のにはひ痛き畑のあなたに暮れゆかんとす。

植物園の鐘鳴る。

事務室の邊より四十ばかりの憐れなる女淡青の風呂敷包を背に負ひ、手には粗末なる密柑函を持ちて歩み來る、木材のにはひ空虚なる函に新し、この女西洋館前のだから坂を下りゆく時その淡黄にて力なき壁の夕日を振りかへる。彼處には簇立せるシユロランの高き幹黒く、硝子窓

にカーテン薄汚なく、入口の扉は半ば斜に開きたり。藁づこの褪めたる色、ハビビヤクシンの傾斜面の暗青色の静止——短艇の船腹の如き雲灰白色の別館の上に薄れんとし、ヒマラヤ杉ひとり早春の風に戦ぐ、大きな魚の青き骨のごとく。

そのかげよりまた四十前後の女園丁三人手拭の頬冠りして出て来る、坂を下るとき、そのなかの素足の女半ば青きシラガミスギの蔭にゆきて、青き辨當の包を取り出しながら連のあとより急ぎゆく。われもまた出で去る。

入口の看守はさみしげに座り、ユヅリハの葉柄の赤きが暮れんとして、閉さぬくぐりの間よりかなたの街の薄ら明をさしのぞき……さしのぞく……



間つ待を春

春の待つ間
（春の待つ間）

一 冬のさきがけ

一

ふくらなる羽毛襟ホ卷マのにはひを新らしむ十一
月の朝のあひびき

261

二

遠々しくなりし女のもとへ二首

いと長き街まちのはづれの君が住む三丁目より冬
は來にけむ

しみじみと人の涙を流すときわれも泣かまし
鳥のごとくに

三

いちはやく冬のマントをひきまはし銀座いそ
げばふるみぞれ霰みぞれかな

電柱でんちゆうの白き堤子ていしにいと細く雨はそそげり冬き
たるらし



四

たましひの薄き睡を見るごとし時雨の朝の小さき自
鳴鐘なづかしき憎き女のうしろでをほのかに見せて

なづかしき憎き女のうしろでをほのかに見せて
雨のふりいづ

五

男ふりには惚れんばな、
煙草入の銀かな貝がそれが因縁たい

煙草入の銀のかな具のつめたさがいとど身に
染むバチと鳴らせど

六

夜をこめて風見かきみのきしりさびしさの身に染む
空となりなにけるかな

さいかちの青さいかちの實となりて鳴りてさ
やげば雪ふりきたる

一月や道化帽子の色あかき一寸坊の小屋に雪
ふる

一

II 戯 奴



二

かなしや雪のふる日も道化ものもんどりうつ
とよく馴れにけり
ほこりかにとんぼがへりをしてのくるわかき
道化に涙あらすな

三

夜よおそくひとりひそかに歸りきて道化衣裳を
脱だる男あり
感か冒ぼなひきそよ朝は冷つたき鼻の尖さひひとり凍こえ
て春を待つ間に

III
雪

一

寂しさに赤き硝子を透かし見つちらちらと雪
のふりしきる見ゆ

二

厨女くりやめの白まき前掛まへかしみじみと青葱せいそうの香かの染しみて
雪ゆきふる

つつましつつましき朝あの食け事に香かをおくる小雨こいうに濡ぬれ
し洎さ芙ふ藍らんの花はな

三

横濱埠頭所見

つや青あおき支那しなの料理りょうり人ひとが面おもてがまへ憎にくしとばか
りうつ霰せんとくかな

腰こしひくき濱はまのガイドガイドが襟えりにさす温室おんしつ咲ひらきの花はな
の色いろの赤あかさよ

四

ぬくぬくと双^{ちり}手^てさし入れ別れゆくマフの毛い
ろの黒き雪の日

薄青き路上の雪よあまつさへ日てりかがやき
人妻のゆく

五

君かへす朝の舗^{しき}石^{いし}さくさくと雪よ林檎の香の
ごとくふれ

六

河岸の明け暮れ

猫柳薄紫に光るなり雪つもる朝の河岸の景色
に

屋根の雪屋根をすべると三味線の棹拭きかけ
て泣く女かな

七

木挽町の河岸の夜ふけに

雪ふるひとりゆく夜の松の葉に忍びがへしに
雪ふりしきる

八

楂チヨコレ古コ津ツ嗅ニホぎて君待キミマつ雪ユキの夜ノは湯ヌル沸ワルの湯ユ氣キも静シズ
こころなし

ああ冬の夜ひとり汝ニがたく暖ヌク爐カマドの静シズこころな
き吐息フキイキおぼゆる

九

ひさよよのつれの
戀コイこなあはれおもひたまひそ

雪ユキの夜ノの紅アカきるろりにすり寄りヨりつ人妻メノとわれ
と何ナニとすべけむ

十

悪夢のあまの朝明

狂ほしき夜は明けにけり
浅みどりキヤベツ畑
に雪はふりつつ

雪ふるキヤベツを切ると小男が段々畑をのぼり
ゆく見ゆ

十一

わかき日は赤き胡椒の實のごとくかなしや雪
にうづもれにけり

IV 早春

一

その翌朝おしろいやけの素顔吹く水仙の芽の
青きそよかせ

二

四十路びと面^{かほ}さみしらに歩みよる二月の朝の
泊^さ芙^ふ藍^{らん}の花

三

つつましきひとりあるきのさみしさにあせ菜
の香すら知りそめしかな

あはれなるキツネノボタン春くれば水に馴れ
つつ物をこそおもへ



五

みじめなるエレン夫人が職業のミシンの針に
しみる雨かな

名なし草紅あかく小ちひさく咲きそめぬみすぎ世すぎ
の窓ひなたの日向ひなたに

六

春が来た。黄色なサンシユユの楢に、沈丁に、
針えにしだの苦き尖りに

沈丁の薄らあかりにたよりなく齒の痛むこそ
かなしかりけれ

七

猫柳春の暗示のそことなくをざる河邊を泣き
てもとほる

猫柳ものをおもへば猫の毛をなづるここに
よき風も吹く

八

細葱の春の光をかなしむと眞晝しみに小犬
 つるめる
 野に來きたれば遠きキヤベツの畑をゆく空ぐるま
 の音もなつかしきかな

九

すするぐは葱か、キヤベツか、
 きさらぎのそこなき春の暗示よ

ふくれたるあかき手をあて婢女はしなが泣ける厨くりやに
 春は光れり

V 寂しきごち

一

かりそめにおん身慕ふといふ時もよき俳優は
涙ながしぬ

295

わが愛づる小さく陋ささしくいぢらしき白栗鼠しろりすの
 ごと泣くは誰ぞや

泣きたまふな、あまりにさびし

いざやわれとんぼがへりもしてのけむ涙なが
 しそ君はかなしき

わがごちよ寂しきごちよつねに見て思へばく
 るし泣かざれば憂うれし

おのがじじ弱きけふ日の涙をばはふり落して
 鳴ける小鳥ら

寂しさのこのもかのもにへりくだり泣けば心の響きこゆる

涙してひとをいたはるよそ人のあつき心をわれに持たしめ

三

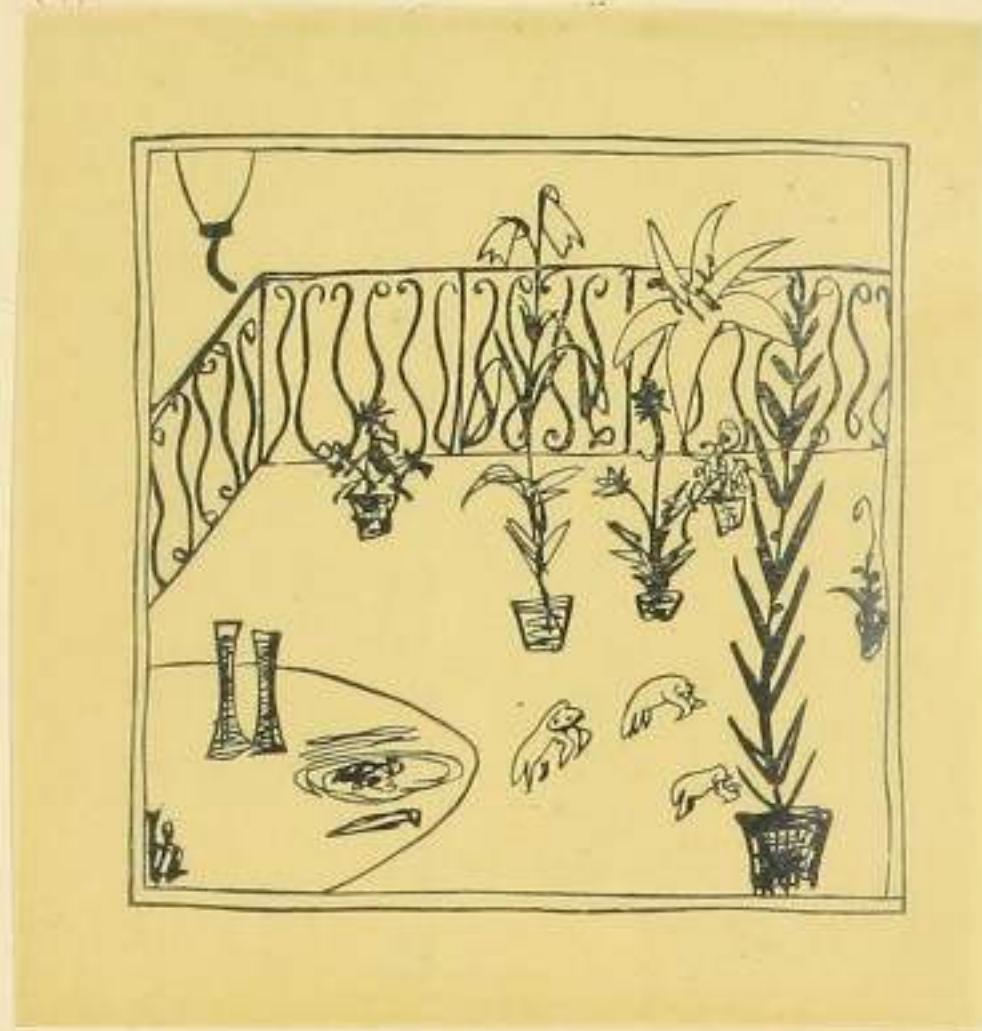
つかのまも君を見ずては抑えがたきかなしき狐つきそめにけり

四

歇私的里の冬の發作のさみしさのうす雪とな
 りふる雨となり
 冷やかに薄き^{まぶた}眸をしばたたく人にな馴れそ山
 の春の鳥

五

芥子のたねひとり^て掌にのせきらきらと蒔けば
 心の五月忍ばゆ



白き露臺

I 春愁

一

わかき日の路上にて

歎けとていまはた目白僧園の夕ゆふへの鐘も鳴りい
でにけむ

305

二

ソフイー、げふもまた氣づかはしさうな
お前の瞳に薄い雲がゆく、薄い雲がゆく

春はもや靜こころなし歇私^ヒ的^ス里^リの人妻の面^カの
さみしきがほご

三

浅草聖天横丁

君見すば心地死ぬべし寢室^シの櫻あまりに白き
たそがれ

四

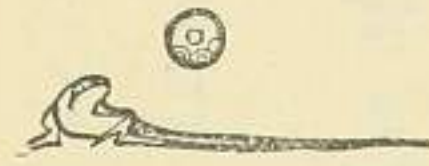
私は思ふあのうらわかい天才のラムボガを、
而して悲しい寶石商人の息づかひな心を

アーク燈いとなつかしく美しくしき寶石商の店
に春ゆく

美しくしく小さく冷たき綠玉エメラルドその玉掬すらば哀かなし
からまし

いと憎き寶石商の店を出で泣かむとすれば雪
ふりしきる

温かに洋傘の尖もてうち散らす毛茸こそ春は
 かなしき
 しみじみと二人泣くべく椅子の上の青き蜥蜴
 をはねのけにけり



六

定齋ぢやうさいの軋きみせはしく橋わたる江戸の横網よこあみ鶯うらの啼なく

櫻さくら、さくら、街まちのさくらにいと白く塵埃ほこり吹きつけ
けふも暮れにけり

七

鐸たたく鳴らす路みち加病院かびやういんの遅おそざくら春はるもいましかを
はりなるらむ

II 夜を待つ人

一

思ひ出の赤き毛糸よ、夕暮の薄らあかり
にたゞたぐれ、静こころなく

やはらかに赤き毛糸をたぐるとき夕とどろき
の遠くきこゆる

二

泣かむとし赤き硝子に背を向けつ夕ゆふは迫る窓
 の内部うちに
 いつしかと身は窓掛に置く塵の白きがごとも
 物さびてける

三

かろがろと女腰かけなにやらむ花あかき窓に
 物思ひ居り
 よしやあしや君が銀座の入日ぞらほのかに暮
 れて夜となりける



四

つくづくと晝のつかれをうらがへしけふもラ
ムプを點すなりけり

編みさしの赤き毛糸にしみじみと針を刺す時
こほろぎの鳴く

五

鳴りひびく心甲斐絹を着るごとしさりさや
さやかかる夕に

これやこの絹のもつれをときほぐしほのかに
夜を待つすべもがな

六

露西亞の白夜にはあらねども

かなしきは氣まぐれごころ宵のまに朝の風た
ちかなかなの啼く

松の葉の松の木の間にちりきたるそのごとは
そきかなしみの來る

III なまけもの

一

なまけものなまけてあればこおひいのゆるき
ゆげさへもたへがたきかな

二

ほれほれと歌ふにしくはなかるらむおもへば
愛しや涙ながるる

ものおもふわかき男の息づかひそなたも知る
やさるひあの花

三

なまけもの晝は晝とてそこなきびんつけの
香にも涙してけれ

へら鷺の卵かへすとなまけものなまけはてた
るわれならなくに

おづおづとわかきむすめを預れる人のごとく
に青ざめて居り

ひさりゐて罪あり

このおもひ人が見たらば墓ひきとなれ雨が降つた
らへら驚となれ

四

わがゆけば男のにほひちかよると含羞草はにかみさうの葉
を閉づるかも

ものおもへば肩のうしろにこそばゆきわかき
をなごのといきこそすれ

五

夕暮のあまり赤さになまけもの
とんぼがへれば啼くほとどぎす

IV 女友ごち

一

ゆくりなく庚申かうしん薔薇ばらの花咲きぬ君を忘れて幾いく
年としか経し

二

うらうらと二人ふたりさしより泣いてるしその目を
 いまになすよしもがな
 ただひと目君を見しゆる三味線の絃いとよりほそ
 く顫ふるひそめにし

三

才高きある夫人に

ほれほれと君になづきしそのこころはや裏切
 りてゆくゑしらすも

四

嗅ぎなれしかのおしろいのいや薄く冷たき情
忘れなくに

五

女は白き眼をひきあけてひたふるに寄
り添ふ淫らにも若く美しく

ごぐだみの花のにはひを思ふとき青みて迫る
君がまなざし

六

あるあはれなる女に

いつとなく親しむとなく寄るとなく馴れし情なさけ
も忘れなくに

七

偽おほく而もなほ美しき女
ありけりその女消えさりにつけり

くちびるの紅あかく素顔のいと蒼き女手品師君去
りにけり

あはれなる人よ
あはれなる人よ
あはれなる人よ
あはれなる人よ
あはれなる人よ
あはれなる人よ
あはれなる人よ
あはれなる人よ
あはれなる人よ
あはれなる人よ

あはれなる人よ
あはれなる人よ
あはれなる人よ
あはれなる人よ
あはれなる人よ
あはれなる人よ
あはれなる人よ
あはれなる人よ
あはれなる人よ
あはれなる人よ

V 白き露臺

一

ひさたが別れて

かはたれの白き露臺に出でて見つわがおもふ
人はいづち去にけむ

二

君には似つれ、
見も知らぬ少女なりけり

佛蘭西のみやび少女がさしかざす
忽忘草の空
いろの花

三

かなしみは出窓のごとし
連理草夜にとりあつ
め微かせぞ吹く

にほやかに君がよき夜ぞふりそそぐ
白き露臺
の矢ぐるまの花

四

その君はいづこにありや、
はつ夏の空も薫りぬ

句よき宵のロベリヤ朝の芥子小窓に据ゑて忍
ぶ日は來ぬ

五

姿見の中の草生よ
老いほけしたんほほも飛ぶ

昨日君がありしところにいまは赤く鏡にうつ
り虞美人草のさく

六

鳩よ鳩よひそりほつちのわが鳩よ

煩惱の赤き花よりやはらかに煙る草生へ鳩飛
びうつる

七

こまり木の鳥のこころよ

夕かけて白き小鳥のものおもひ木にとまるこ
ろさみしかりけれ

空いろのつゆのいのちのそれとなく消^けなまし
ものをロベリヤのさく

八

空いろよりすこし濃きロベリヤの花は
ほのかに小さくして、しかも数かたまり
て瞳をひらく。悲しき日その花をながめ





函小の覺感

いつの日か懐かしいと思つて小窓に据ゑて置いた忽忘草も、青い金剛ダイオウ石シドフラワ花も、空色のロベリヤももうみんな枯れてしまつて、小石川の植物園に新たに茴香の花の咲く時節が来た。梧桐のかげに客待をしてゐる人力車夫にも、銀座の横町に荷を下すバナナ賣の半纏にも硝子屋の白い斜面の日覆ひよかにも、愈夏らしい強い光が照りつけて、早や日中から張りわた

した蟲賣の露店の薄い天幕テントのかげにも幽かに鈴蟲が鳴きはじめる。なつかしい、然し何となく寂しいやるせない夏、夏は丁度白い服をきたヒステリーの看護婦の夕方の露臺バルコニーに出て吹き鳴らすはるもにかのやうに何時も私に新らしい哀傷のたねを蒔かしめる。

敬虔な私のいまの心持は輕薄なワイルドの美しい波斯模様の色合から薄明りの中に翹ばたく白い羽蟲の煙のやうなロウデンバツハの神經に移つてゆく。靜かな夏の日の獨居ひじりみが私の心をまた小さな仙人掌さぼてんの刺のうへに留らせ、黄色い名も知れぬ三ツの花のうへにしみじみど飛びうつら

す。このふた月あまり私はただ靜かに自分自身の心を觀照して、燃え狂つた煩惱の花壇から幽かな銀色の蟲の音を拾つてゆくより外に騒がしい周圍の如何なる事情からも禍される事が無くて過ぎた。私の目下の一大事は驕奢な貴公子の生活を羨む事でもなく、また華やかなバンドマンの歌劇を觀にゆくことでもない。さうして無論流行はやりの背廣を着てお馴染みのカツフェに苦い珈琲を啜り、リキュールの冷たいさかづきに唇をあつることでもない、おしろいの匂と酒と友人とに離れてからもう既すでこ久しい時が経つた。私はただ獨り薄明うすあかりの窓側まどがはに坐つて繕よれからだ神經の絹

糸のもつれをときほぐし、或は冷たい硝子のフラスコのそのたよりない皮膚の上をつつましやかに匍ひ廻る小さな細蟻の感覚に心をあつめ、いかにしてまた西洋葵の花弁の上に悲しい一日の歎きをこんぼがへりさせるかといふ、たつたそれだけの謙遜な心に眞實私自身を洗練して、品の高い陰影の微光のなかに幽かに思想の芽をひらく、譬へやうもないその美くしい歡會の時の來るのを待つてゐる。

近代の傷ましい惱みからぬけいでて純なる小鳥の心にたちかへれよ、たい自らを偽るな、涙を惜しめ、而して美くしい小さな冷たい緑王のご

とく常に悲しい光に息づけよ。若しわれと己れ自身を偽つたなら、白い鴛鳥は蟾蜍となり、黄金の匙は怪しいニッケルのナイフとなり、酒は酢となり、きりぎりすは蚯蚓となり、戀人の美くしい眸は忽ち賤しい波羅門の腕環にはめられて一生を淺ましい脂汗と怪しい畜類の匂に汚されて了うであらう。

暑い夏の日に涙をながし、さうして身のうちによそならぬわが汗の臭ひを嗅ぎ、なつかしい自分の命を、人よ、汝がしみじみと思ひ知りえた時、微かな夏と心との感覺をわれとわが指さきによせあつめて浮彫の寂

しい小さな白金プラチナの函のなかに入れ、而して蓋ふたをかたく閉して、幽かな薄明の中にさし置けよ。而して寂しさに堪へかねた時、その上に薄いリキユグラスをのせ、強いウキスキの少量を注げ、その黄色の漣が幽かな陰影の刺戟を顫ふるはせて白金プラチナの微光に投げかくるとき封じらたすべての哀傷が恰も冷たい鍼はり醫いの銀針のやうに、或は黄緑、青紅、様々の光澤と信實ある結晶の涙を湛へた美しい寶石の音譜のやうに、初めて底の底から洗練され命づけられた感覺の啜泣すすり泣きを、幽かに幽かに不可思議な夜天のバノラマに傳へるであらう。

私はうらわかい寶石商の涙をよく知つてゐる。さうしてあの天才のラムボヲを嗾かして寂しい商人の群に驅り立てた怪しい寶石の心を、誘惑を、譬へやうもない美しくいその魅力を悲愁かなしみをよく知つてゐる。さうしてまたオスカアワイルドやヴェルレエヌを牢獄の底に泣かした悲しい耽美の心意氣をも、青玉の露をふり落す葦の葉の囁きをも、カアネエシヨンの花を恐るる小さな緑蛇の心をも、私はまたよく知つてゐる。愛人の胸から貰つた小さな青玉の音色は絶えず新らしい私の涙に濡らされてりんりんさあるかなきかに鳴り響く。而して晝は幽かに、夜は清

く、朝は寂しい自鳴鐘のやうに時雨の靈をそそのかしてほのかに白芥子の花に纏る。ともすれば置き忘れたその青玉の眸は微かなタナグラ人形の陰影から小さな玉蟲の眼のやうに顫へて、絶えず移り氣な私の心を氣遣はしさうに熟視める。而してオペラの幕あきの合圖の電鈴のやうにとりとめもなく逍遙うてゐる私の夕暮の感覺をひき戻す。

夏、夏、夏の薄暮は何時もアーク燈の光のやうに薄紫の涙に濡れ潤つたやるせない寂しい微光の氛圍氣を私の心の周圍にかたちづくる。而して今日のとりとめもない感想も微かな白い羽蟲となつてその陰影の中に閃

めきながら、鳴り響く青玉の音色も暮れてゆく……屏弱な心、繊細な絹糸のもつれをかたよせて、私はまた久し振りに、あの銀座の青い柳のかげの白い瀟洒な喫茶店の椅子に寂しい孤獨の身をなげかけて、せめては冷たい一杯のアイスクリームにさらに悲しい哀傷の新らしさも味つて見やうかしら、それとも例日のやうに名も知れぬ黄色い三つの花の上に小さな私の靈をあづけて、たつた獨りで何時までも何時までも泣いてゐやうかしら。それとも私の小さな涙の玉を赤い西洋葵の上に一踊りさんぽかへりをさして何がなしに笑つて見やうか。……ああ、とうとう



哀傷篇

358

日が暮れて、鳴り響く青玉の音色も暮れてゆく。

(Echizenbori, 28, VI. 1912.)

罪びとソフイーに贈る

三八七番

一 哀傷篇序歌

一

ひとすぢの香かの煙のふたいろにうちなびきつ
つなげくわが戀

361

二

自棄二首

あだごころ君をたのみて身を滅す媚薬の風に
吹かれけるかな
哀しくも君に思はれこの惜しくきよきいのち
を投げやりにする

三

花園の別れ六首

君と見て一期の別れする時もダリヤは紅しダ
リヤは紅し

君がため一期の迷ひする時は身のゆき暮れて
飛ぶここちする

哀かなしければ君をこよなく打擲うちちやくすあまりにダリ
 ヤ紅あかく恨めし

紅くれなゐの天竺牡丹ちつと見て懷妊みこりたりと泣きて
 けらずや

身みの上の一大事とはなりにけり紅あかきダリヤよ
 紅あかきダリヤよ

われら終はつに紅あかきダリヤを喰ひつくす蟲の群か
 と涙ながすも

II 哀傷篇

一

悲しき日 苦しき日 七月六日

鳴きほれて逃ぐるすべさへ知らぬ鳥その鳥の
ごと捕へられにけり

二

かなしきは人間のみち牢獄みち馬車の軋みて
ゆく磔道

眼をつぶれど今も見えたる草むらの麥稈帽は
光るなりけり

馬車霞が關を過ぐ

大空に圓き日輪血のごとし禍つ監獄にわれ墮
ちてゆく

胸のくるしさ空地の落日あかあかただかが
やけり胸のくるしさ

まさまざとこの黒馬車のかたすみ身を伏せ
て君の泣けるならずや

夕日あかく馬のしりへの金網かなあみを透きてじりじ
り照りつけにけり

向ふ通るは清十郎ぢやないか
笠がよう似た菅笠が

夏祭わつしよわつしよとかつぎゆく街まちの神輿かみこし
が遠くきこゆる

泣きそ泣きそあかき外との面おもの軒のきしたの廻り燈
籠かごに灯ひが點つきにけり

三

うれしや監獄にも花はありけり
草の中にも赤くちひさく

紅べにの花
しみじみと涙して入る君とわれ監獄ひきやの庭の爪つま

やつこらさと飛んで下りれば吾わが妹子もこがいぢら
しやじつと此こ方向ちいて居り

女はさく庭に下りて顔へゐたり、数珠つなぎ
の男ははその後よりひさりひさりに跟けつ
つ匍うひいでて紅き爪紅べにのそばにうち顔へゐ
たり、われ最後に飛び下りんと身構へてふさ
をかしくなりぬ、帯に繩かけられたれば前の
奴のお尻がわが身體を強く曳く面白きかな
悲しみ極まれるわが心、この時ふいと戯けて
やつこらさのささいふ氣になりぬ

同じく二首

編笠をすこしかたむけよき君はなほ紅あかき花に見入るなりけり

鳳仙花紅あかく咲ければ女子もかくてかなしく美しくあれよ

四

監房の第一夜

この心いよよはだかとなりけり涙ながるる
涙ながるる

罪びとは罪びとゆるになほいとしかなし
らしあきらめられず

五

ふたつなき阿古屋の玉をかき抱きわれ泣きほ
れて監獄ひきやに居たり
ごん底の底の監獄ひきやにさしきたる天あまつ光に身は
濡れにけり

テテツプツプ
彌惣次ケツケ

日もすがらひと日監獄ひきやの鳩ぽつぽつぼつ
ぼつ物おもはする

* 柳河の童話、テテツプツプは鳩ぽつぽつのこと

六

二日經て弟面會に來りければ

監獄ひじやにも鳳仙花咲けりいと紅あかしとこの弟に言
ひ告げやらむ

母びとは悲しくませば鳳仙花せめて紅あかしと言
ひ告げやらむ

七

監獄の庭に引き出されてある時

いつまでか日は東よりのぼるらむ昨日きのうに同じ
赤き花咲く

あはれなる獄卒あかどもが匍ひかがみ紅あかきダリヤ
の毛蟲とる見ゆ

太陽のもさに許されて尿するは
うれしきかな樂しきかな

狂^{きやう}人の赤^{あか}き花見^{はなみ}て叫^{こゑ}ぶときわれらしみじみ出
て尿^{いばり}する

赤^{あか}き花見^{はなみ}つつ涙^{なみだ}し頑^{かたく}なのこの若^{わか}ものが物言^{ものごと}は
ぬかも

バリカンの光^{ひかり}うごけばしくしくと痛^{いた}き頭^{かしら}のや
るせなきかなや

バリカンに頭^{かしら}あづけてしくしくとつるむ羽^は蟲^{むし}
を見詰^みめてゐたり

九

眞晝の監房にてある時

おのれ紅あかき水蜜桃みももの汁じゅうをもて顔かほを描かかむぞ泣なける
汝なれが顔かほ

夕ゆふされば入い日血ひちけつのごとさしつくる監獄ひんがくうれし
や飯いひを食たべてむ

またある時

驚おどろきてふと見みつむればかなしきかわが足の指ゆび
も泣なけるなりけり

わが罫か丸まるつよくつかまば死しぬべきか訊きけば心こころ
がこけ笑わらひする

淫^{なま}れ歌うたひつくして泣くなめり忘れ難かり
あきらめられず

殺人犯隣にあり

猫のごと首絞められて死ぬといふことがをか
しさ爪^{つま}紅^{ぐれ}の咲く

監獄にて子を生みし女ありけり
いかなる罪業のめぐりなるらむ

恐ろしくおのれ死なむとつきつめぬいきいき
とまたも赤子啼き啼く

夕されば火のつくごとく君戀し命いとほしあ
きらめられず

十

夕暮より夜にかけて

曇り日の桐の梢に飛び來りかたかな 蛸鳴けば人の戀し
き

市ヶ谷の逢魔あまが時となりにけりあか**ん**ぼの泣
く鼻の啼く

夜となりぬのうまくさん**ま**んだばさらだせん
だまかろしやだどわが父の泣く聲のきこゆる
鼻はいまか眼玉めだまを開くらむごろすけほうほう
ごろすけほうほう

深夜二首

たれこめて深きねむりに墮つる時わが傍に來
り寢る女あり
君もなほ死なすしありけむさめざめと夜の間
に見えて涙を流す

十一

裁判の日、七月十六日

一列に手錠はめられ十二人涙ながせば鳩ぽつ
ぽ飛ぶ

鳩よ鳩よをかしからずや囚人の「三八七」が涙な
がせる

十二

法廷へのゆくみちにて

向日葵向日葵囚人馬車の隙間より見えてくる
く
る
か
が
や
き
に
け
れ

十三

すべてなつかしすべてなつかし

鳳仙花われ禮すればむくつけき看守もうれし
や
目
禮
し
た
り

鳳仙花よ監獄にも馴れ罪にも馴れ囚人にさへ
も
馴
れ
む
と
す
る
か

十四

許されたり許されたり

監獄いでぬ重き木蓋をはねのけて林檎函より
をどるここに

監獄いでぬ走れ人力車よ走れ街にまんまろな
お月さまがあがる

十五

監獄いでてじつと顫へて噛む林檎林檎さくさ
く身に染みわたる

くれなるの濃きが別れとなりにけり監獄の花
爪紅の花

III 續哀傷篇

一

空見ると強く大きく見はりたるわが圓つぶら眼に
涙たまるも

二

鳥羽玉たまたまの天竺牡丹あまつさへ咲きにけり男手に取り涙を流す

鳥羽玉の黒きダリヤにあまつさへ日の照りそそぐ目の照りそそぐ

三

お岩おいわ稻荷いなぎにゆきて

あまつさへ夾竹桃あざみの花あかく咲きにけらすやわかき男よ

四

木更津へ渡る。海濱に出でて
あまりに悲しかりければ

いと酢^すき赤き柘榴^{ざいろう}をひきちぎり日の光る海に
投げつけにけり

松川さいふ旅館に泊りぬ
白き猫あまたるたりけり

白き猫あまたるねむりわがやどの晩^{ばん}夏の正^ま午^{ひる}
近まりにけり

驚きて猫の熟^み視^つむる赤トマトわが投げつけし
その赤トマト

五

あかあかと騒ぎ廻りそ人力車夕日に坐り泣く
 男あり
 またぞろふさぎの蟲奴がつのるなり黄なる鶏
 頭赤き鶏頭

六

やはらかにロンテニースの球光る公園に来て
 けふもおもへる
 草の葉に迂りちろめく青蜥蜴その兒悲しも夕
 日は光る

七

くつわ蟲を蟬かと思うた、
ひそりひるれの宵のねざめに

かなしければ晝と夜とのけぢめなしくつわ蟲
鳴くかなかな蛸の鳴く

八

曇り日の朝の瓦の見はるかしを鳩歩み居れり
さみしきか鳩よ

電線はりだに雀とまりてつるみたり悲しかりけりま
た飛んでけり

九

心心赤き實となり枝につく鴉食まむとすはぢ
ぎれむとす

暴風雨來りぬ面白きかな面白きかな

柿の赤き實隣家のへだて飛び越えてころげ廻
れり暴風雨吹け吹け

十

淺草にて

電線に鳶の子が啼き月の夜に赤い燈が點くび
いひよろろよ

なになれば猫の兒のごと泣くならむ鳶とまれ
り電線の上

河岸あるき

横網よこあみに一錢蒸汽近づくと廻るうねりも君おもはする

見れば乞食かたみは腐れ赤茄子あかかをかいつかみひたぶる泣きて食くふなりけり

小犬二匹石炭舟いしがねのふなべりを鳴けり狂へり夜に叫び居り

ぬば玉のくらしき水の面おもてを奥ふかく石炭舟のすべりゆきにけり



十二

冬來る

十一月は冬の初めてきたるとき故國くにの朱アカ櫨ボシの
黄にみぬるとき

曉々とひとすぢの水吹きいでたり冬の日比谷
の鶴のくちばし

IV 哀傷終篇

一

かなしみに顫へ新たに
はぢけちるわれはキヤ
ベツの球たまならなくに

二

くるしくるし堪へがたし

わが心ただひとすちとなりにけり笛を吹け吹
けさんほがへれよ

ひとをどりひやるると吹けば笛の音もひやる
るふれうと鳴るがいとしさ

三

思ひ出のひまつふたつ

代々木の青櫛あをかみがもとに飛びありく白栗鼠しろりすのご
とく二人ふたり抱きし

春くれば白く小ちひさき足の指かはゆしと君を抱
きけるかな

手にぎりてかたみに憎み尊菜じゆんさいの銀の水みづ泥どろを見
 つめつるかな
 死ぬばかり白き櫻に針ふるとひまなく雨をお
 それつつ寝ぬ

蠟燭をひとつ點ともして恐ろしきわれらが聞きをう
 かがひにけり
 その翌朝あさ君とわが見て慄ふるへたる一寸坊が赤き
 足藝

四

舊歡さごめがたし生はかたく死はやすし

ひなげしのあかき五月さつきにせめてわれ君刺し殺し死ぬるべかりき

五

男泣きに泣かむとすれば龍膽りゅうたんがわが足もとに光りて居たり

このかなしき胸のそこひゆこみあぐるくるめきの玉は鐵の玉かも

六

來て見れば監獄署の裏に日は赤くテテツ
ツと鳩の飛べるも

囚人の泣く聲か拷問の叫びか

と見れば監獄署裏の草空地にぶらんこの環の
きしるなりけり

七

野邊あるき

氷閉ち野菜つめたき冬のみちゆけどもゆけど
も人に逢はなく

煤烟たなびくもとに葛飾の青菜畑ははるばる
と見ゆ

八

夜ふけて

ぐろきしにあつかみつぶせばしみじみとから
紅くれないのいのち忍ばゆ

時計の針IとIとIとIにきた來るときごく君をお
もひつめにき

九

母の云へらく

ざれざれ春の支度にかかりませう紅あかい椿が咲
いたぞなもし

十

あかんぼを黒き猫来て食みしといふ恐ろしき
 世にわれも飯食む
 犬が啼き居り乾草ほぐさのなかにやはらかく首突き
 入れて犬が啼き居り

十一

ひもじきかなひもじきかな
 わが心はいたしいたしするどにさみし

吾が心よ夕さりくれば蠟燭ろうそくに火の點つくごとし
 ひもじかりけり



猫白

いかにも惱ましい晩だつたと思つた。歩あ行いてゐるとまるで自分の身かみ體だが蒼白いセンジュアルな發光の中にひきつつまれて匂かのふかい麝香猫か何ぞのやうに心までが腐爛してゆくかと思はれた。

霧、霧、濃密な深い麻酔の雰圍氣に新鮮な瓦斯が光り、電燈がぼやけ、アーク燈が濡れた果實のやうに香氣を放ち、葉柳のかげに、舗石に、店

々の飾窓シヤウウインドウに、さまざまの光澤と陰影とが入り亂れて息づかひ深く霧が愈
 ぶりそそぐ。行きかふ人かげ、馬車や自動車ひの燈ひのくるめき、電車の鐸すず
 —銀座の二丁目から三丁目にかけて例も見馴れた淺はかな喧騒の市街
 が今はばかされ掻き消されて、ただ不可思議な恍惚と濃厚な幻感とが恰
 度水底のキノオラマのやうに現出する。

その底を私は歩行あいてゐた。たとへ無罪になつたにせよ、かりにも人
 妻と牢獄に墮ちた私、敗徳者、——私は深い心に泣き乍ら幻想の燈ひかげ
 に弱つた身體からだを勞つてゆく、潤うるつた霧がそこにもここにも重い層をなし

て私の身邊を壓へつける。夏帽子の麥稈、啣えたパイプの火、冷たい目、
 耳、終しまひには背後うしろから肩に手をかけ、咽喉を絞め、剩へ甘いものの腐れ
 た匂さへ病ましい雨の頬つべたに吹きつける。而も耻と悲哀に弾ぢざれ
 さうな胸を抑えて、怖々おどろと人目を忍んで歩ありてゆく切りつめた今の自
 分の心にも何時しか忘れはてた淫蕩な罪の記憶が泣かむばかりに芽ざし
 てくる淺間しさ。白い霧の中に立つて振り返ると、白い尻尾でも動くや
 うに足元から怪しげな影が逃げてゆく、向き直つてそつと歩み出すと重
 い霧の層までが又ふうわりと後から白くからみつく。眞白な獸けもの、私は顫

へて自分の身體がさうした陋^さしい不思議な白い獸^{けもの}に變化してゆくのではないかと思つた。苦しい、苦しい、まるで獸芝居に出てくる白猫の役者のやうに初めは白い毛皮の身のまはりを嘲笑^{あざわら}つてゐた人間の浮かれ心まだが、遂には眞實に淫逸な四足獸の惱ましい悲念に歸つてゆくのではなにかとさへ思はれる位、霧は怪しくふりそいでくる。私は心の心に泣きながら、痛さに腫れた乳の上をしつかと抑えて、折々不氣味な若い白痴の女のやうに自分の背後^{うしろ}を振り返つた。そのうちに何時の間にやら重いたざたざしい足ごりが泥酔漢^{どろよめ}めいて來て、時とするとその痛い乳の上か

ら眞白な畜生の手でもふいと飛び出しさうなそんな氣がしてただもう恐ろしく、抑えては引つ込ませ、抑えては引つ込ませ、益々深い濃霧の中をあてごもなくまぎれ込んで了ふのであつたが……。

たがもう、時が過ぎた。

夜が更け、空が霽れ、蒼褪めはてた經驗の貴さと冷たい靈性のなやみを染々と身に嗅ぎわけて、哀傷のけものは今深い闇のそこひからびやうびやうと聲を秘^{ひそ}めて鳴き續ける。將に午前二時半、夜明前三時間、拭き

すました紫檀の机に鏡を立て、つくづくと険しくなつて了つたわれとわが顔をちつと凝視めてゐた私は心の底から突きあげてくる悲しさど狂ほしさから、思はず傍にあつたグロキシニアの眞赤な花を掴みつぶした——鏡の中に一層強く光つてゐた罪惡の結晶が血のやうに痙攣んだ五つの指の間から點々と滲み出る。引き裂き、かき捲りながら緊張しきつた心がまた遺瀨もなく啜泣く苦しさ。幸に獸ともならず迷うて迷ひぬいて、やつと夜ふけに静觀の境地を得た私の靈魂はまた少らずわれど驚かされて、そつとまた鏡の中を透かした。哀れな腫が狂氣したやうな額

の下からちつと此方を見てゐる。私は愕然として乳の上を抑えた、白い手の芽も飛び出さなかつた。と思ふとちつと黙んだ唇が稍安心と憎惡の薄笑ひを浮べる。

夜が愈更けた。發作の後の悲しみが又犇々と迫る、深い恐怖に顫へ乍らグロキシニアと冷たい鏡を片よせて、私はまた新らしく顫へ初めた素つ裸の感覺から眼を凝らし、耳を聳て、まるで匍ひつくばつた生蕃の兒のやうに生々と暗い闇の核心を凝視めた。

こほろぎが鳴いてゐる……あれほど執拗く人を苦めた白い濃霧の集

團までがもう微の毛ほどの細かい初秋の啜り泣きとなつて消え散つて了
 ひ、靈岸島の瓦から瓦へ、ただ幽かに薄明るい露の潤りがチラチラと夜
 光虫の漣波の如くに私歌的里の蒼い光をすべらし、取り残された彼方此
 方の陰鬱な重い土藏の廂合から今はまたセンチメンタルな緑色の星の影
 さへ一つ二つと燦めき初める、ホフマンスタールの夜の景色、暗碧な空
 の心——こほろぎまでが恐ろしいお岩稻荷の物かげからまるで小さな硝
 子玉でも磨り合はせるやうに絶間もなく感覺的な啜り泣きを續ける。

——苦痛と羞辱とに惨たらしく心のデリカシーを傷けられて神経は愈

鋭く知覺は彌が上に冷たくなつてゆく私の現在にもなほ哀しみ極つたか
 ういふ法悦のひと時はある。さり乍ら、緊張し盡した今日此頃の感傷の
 鋭さは殆どその極度に達してゐる。苦しい、今のやうな切迫つまつた生
 活があと三日と續いたなら私は狂氣するか、自殺か、それとも疲れはて
 た肉體自身がそれより以前に脆い破滅を持ち來すか、何れにしても私の
 生命は長い事はない。目下の錯亂した官能には最早や嚮虫と蝸と、隣家
 の自鳴鐘とさきりぎりすとの區別さへつかぬほど晝と夜とが顛倒され、色
 觸の世界にも何時しか夏と冬とが入れ代つて了つてゐる。剩へ日が血の

やうに西からのほり、月が痺れて東へ落ちかかる怪しい神経病者の幻想
さへ時折発作のやうに靈自身を憎やかす。

今もこほろぎが鳴いてゐる。私はちつと坪庭の闇を透かしながら、そ
こに如何なる罪惡が企まれつつあるか、如何なる草木昆蟲の感覺が又か
ういふ深夜の心に冷笑し、惑溺し、干涉し、聲もなく歎歎し流涕するか
に耳を傾けた。それがよしや暗黒の中に各々幽かに萬物照應の理順を秘
してゐるとはいへ、鋭感な今の私には松の葉が如何に光り、襷が如何に
戦慄し、雪の下が如何に肺病の蒼白い皮膚を滑らかな苔の上に擦りつけ

るか瞭然感知し洞察する事が出来る。

沈黙が一しきり續いてゆく。

ふと異しい物音がした、キキと何かを引つ搔くやうな、………と思ふ
とまた性急に、然し怖々と、否寧ろ時折は粗雑に四肢で引つ搔きちらす
悪戯な爪の響——それが絶間もなくキキとキキと續いてくる。畜生奴！
私はつと立つて電燈をバツとその方へ向けた。薄綠色の生絹の笠を透か
して青く漉されたオスラムの燭光が二階から出窓を斜めに暗い隣の屋根
へさつと射す。私はちつと注意深くその方へ眼を注いだ。

何といふ悲しい光景シーンであろう、そこには不意の輝きに驚かされた柿の木が眞青に顫へ上つた、と思ふと、濡れた葉とまた眞青な果の簇むらがりがキラキラと私の眼を射返した。何たる神秘、落ちついた眞青な輝き……暗い深夜の秘密に密醸された新鮮な酸素の噎びが雨後の点滴てんてきと相連れて、冷たい靈性の火花も今眞青に慄わなき出した。……その下に猫がある。白い小さな猫がある。青い葉かげを透かして、緑青色に燦きらつき出した新らしいコルター塗の屋根の傾斜面からはつと驚いたやうに此方こちらを眺めてゐるではないか。——顫へる如ごとに白い華奢きゃしゃな身を竦すくめ、背を聳たて、ただち

つと青い射光の一點を見上げたまま、退のくにも退のかれず、全身の悲哀と恐怖とをたつた二つの金色の瞳に集めて、吸入るやうに前肢まえあしをそろへた、あの眼、あの眼、あの切迫せつぱく詰つまつた眼の光、……ちつと凝視みつめめてゐるうちに私の瞳は未だ曾つて見たことのない皮肉な微笑と燃え上る憎悪と怒りに顫へて來た。

二つの靈がひたと今向ひ會つてゐる。而して各々の急所急所をきゆつと凝視みつめめて、痛ましいほどの凌辱を相互に續ける、その恐怖おそれと、憎々しさ、私は電球の尖をキツと差向けたまま、まるで青ざめはてた大刀の魚

のやうに立ち竦んだ。

ふと、ある苛酷な夢の記憶が私の胸の底から突き上げる。

*

それは今朝ほど（もう昨日の事になつたが）の夢に見た、夢とも覚えぬほどの確に而して冷酷な一喜劇である。

夢は幽かな金線の顫へから初まる。ただ蒼い幻の中の出來事である。冷たい何かの切石の上に、幽かな薄玻璃の鏡の如に坐つて居た私の前に何時からとなく現れてひたと一列に座つた八九人の兒供がある。うち

見るところ七八歳から十五六歳までの頑是ない稚兒の時代から既に物心ついた少年期の成人しきつた顔容の奴まで、それがたつた一人の生長史をまざまざと見せつけられるかと思はれるまで、眼の大きい、額の廣くつて青い、鼻の尖つた、何れも寸分違はぬ、小賢しい面色をしてゐる。而してただちと私を凝視めてゐる。蒼い光が何處からともなく其奴らの横顔に射しつけると恐怖とも驚異とも、悲しさとも怪しさとも何とも名状し難い冷たさが犇々と私の身邊に詰め寄せて來た。暫時誰一人口を開くものがない。遠くで幽かにチリツンチリツンと一絃の金線をつまぐ

る音色がする。

『どうぞその兒を引き取つて下さいませんか。』

私は愕然とした。聲がしたのである。確かに、それが聞き覚えのある聲である。人間の聲とも畜類の呻きとも、又は草木の叫びとも、何ともつかぬ、冷酷な、それでなほ偏に絶り付くやうな、さうかと思ふと又心から人を見くびりせせら笑ひ影の影から操かし瞞らかすやうな、一度聽いたら逃れる事も忘れる事も出来ない、何かの深い執念と怪しい魔力を秘めた聲音である。

『たつた一人で宜しいのです、どうぞ何奴か拾つて下さいませんか。』

聲は何處からともなく追ひ絶るやうに續いた。愈媚びて愈悲しげな哀訴の裏には切つて放した残忍と詰詐と苦しい蠢惑とがある。私は慄へた。而してただちと一列の子供達を凝視めた。同じやうな冷たい顔がちつと同じやうに此方を眺めてほろりほろりと圓らな大きい眼の底から涙を流してゐる。私の頬にもほろほろ涙が流れてきた。

チリツンチリツン……金の絛をまさぐる音色がする。

その聲は何處からした？ 私は其奴らの背後を差覗くやうに幾度か蒼

い光の中を透かして見た。猫兒一匹ゐさうにもない。ただ置いてきぼりにされた幼い靈が泣いてゐるばかり、金の絃の顛音さへはてはやんで了つた。

憐憫と憎惡とが犇々と迫る。私はさうしてゐる内にこの中の一人をどうにでもして引き取らねば濟まないやうな恐ろしいある魔力の壓迫と切實な愛情の罨わなに引き墮されて了つたやうな氣がする。もう一度怪しい聲がしたらどう爲やう、あれかこれか、眞蒼な私の眼が列の端から端までずつと見渡すと、一緒にその大人まぢな陋しい、眼の大きく額の白い子供の

顔がさも恨めしさうにほろほろ泣いてゐる。

私は愈切迫つま詰つたと思つた——然し聲はそれつきり、いくら待つても待つても誰も何とも云ふものがない。次第に恐ろしい沈黙と突き放されたやうな寂しさが切々と私の心を襲ふて來た、恐ろしい、どうにかして逃げ出したい——

チリツンチリツンとまた金の絃を弄ぶ響がする。

*

私ははつとして、電燈の栓ねぢをひねつた。と一緒にかさかさど慌てて逃

げてゆく物音が、眞闇まつくらに掻き消された亞鉛屋根から忍びがへしに飛び下り、忍びがへしから板扉の裏を轉がるやうに迂り落ちるその迅さ、慌ただしさ……

逃げたな、畜生！ ほつと吐息をついた、私は今、眞闇まつくらな向ふの路次口に轉がり落ちて逃げてゆく猫の滑稽な動作を想像した、而して急に勝ち誇つた感情の弛緩と陋ささしい皮肉な冷笑とが多少の可笑をかみをさへ交へて私の心に突き上げてきた。私はまた何となく軽い安堵を覺えた、而して更に注意深く幽かなその夜明前の微光を透かした。

夜は益々更ける、而してこほろぎがまた恐ろしいお岩稻荷のかげから冷たい硝子玉をすり合せて鳴きつゝのる。

再び電燈をバツと點けた時、私はそこに初めて信實な柿の木姿を見る事ができた、新らしい悲哀かなしみと驚異おどろき、まだ固い眞青な柿の實はキラキラと厚い葉の簇から銀と緑を射返し、あの華奢な白猫のゐたあたりには、ただ空しいコルター屋根の斜面だけが今まるで青硝子のやうに上り輝いて、葉末に残つた露の點滴のみ幽かに光つては消えて落ちた。
こほろぎが鳴く。

私はまた静かに寂しい闇の核心を凝視めながら、更に新らしい靈魂の薄明を待たねばならぬ。

蟲のぎさふ

大正元年八月二十六日午後四時過ぎ、俺は今染々とした氣持で西洋剃
刀の刃を開く。庭には赤い鶏頭が咲いてゐる。細い四角の西洋砥石に油
をかけ、ぴつたりと刃を當てると、何とも云へぬ手あたりが軟かな哀傷の
迂りを續ける。奇異な赤い鶏頭、縁日物ながら血の如な鶏冠の疣々が怪
しい迄日の光を吸ひつけて、じつと凝視めてゐる私の瞳を狂氣さす。

鶏頭、汝はまるで寂寥と熱意との一揆のやうだ、何時でも汝の集團さへ見ると俺の氣分が鬱ぎ出す。

餘程眠りこけて居たのか、晝寐から俺が覺めた時にはもう誰一人家内には居なかつた、晝間の活動でも見に行つたものと見える。而して俺一人が裝飾も何にもないガランとした下座敷にぼつねんどかうやつて坐つて居る。何にも爲る事がない、ただもう倦怠るい、仕方が無いので妹の鏡臺を縁側に持ち出して又かうやつて剃刀の刃を當る。鶏頭が莫迦に光

る、それかと言つてくわつと光つた外光の中に何かしら厭な陰氣さが嘲笑つてでもゐるやうに、赤い鶏頭が眼に染みる、莖が戦ぐ、その根元から小さい蜥蜴が走り出す。

何處かで御大喪中の忍びやかな爪弾の音が洩れる。晝の三味線、赤い鶏頭、それが眞赤に陰氣にこんがらがると、今度はまたお隣のお岩稻荷から恐ろしいお百度參りの祈願と呪咀との咽び泣きが絶間もなく俺の後腦に鋭い映畫の閃光を刺し通す。

Gen-gen, byō-soku-byō, …… Gen-gen, byō-soku-byō, …… お岩稻荷大明神様……南無妙法蓮華經……

日が光る、くわつと暑い空気が淀む、鶏頭が笑ふ……石鹼を剃毛で掻き立てて顔一面に塗りつけると、白子のやうに眼ばかり青く光り出す。剃刀をびたつとつけてすうつすうつと這らせると寂しい心が無性に晴々する。

それでも鶏頭、鶏頭、俺は悲しい。

真赤な歇私的里の鶏頭、

お岩稻荷大明神様……

不圖、俺は氣がついた、何といふ坐り態だ、まるで汝の肉體は白痴の女見たいにぶくぶくだねえ、だらしのない、どんなに暑くたつて、もつとチャンと坐つておゐでなさい。

眼が鏡の中で笑ふ、剃刀が咽喉の薄い皮膚を這る、危ない、グツと突つ込んだら汝は其儘寂滅だ。

——^{あにき}哥兄や二階で木遣の稽古、音頭取るのがアリヤ良人^{うちのひと}エンヤラナ

……

にとにとど石鹼が指さきに流れる、氣味の悪るい、冷たい、かと思ふ
と何處かで忍び笑ひの聲さへ聽へる、三味線が急にはしやく、

……エンヤラヤレコノサア……サノセーアレワサエンヤラナ……
唄ごころかい、

俺は苦しい、苦しい、鶏頭、眞赤な鶏頭、

日が光る、お百度参りが泣く、俺の後腦が眞赤に^{またた}瞬く。

露西亞の所謂トスカではないが、今日此頃は鶏頭さへ見ると俺のふさ
ぎの蟲がしくしくと腹の底から募り出す。

Gen-gen, byō-soku-byō……Gen-gen, byō-soku-byō……お岩稻荷大
明神様……南無妙法蓮華經……ごうぞ旦那との縁が切れますやう
に……

恐ろしい、眞晝間^{まっぴるま}に何事だ。

おやお前さんは泣いてるね、鏡の中で泣きつ^{つら}面するのはお止^よしなさい

鼻でも剃り落したらどうします。

鶏頭、鶏頭、真赤な鶏頭。

ふ。まだ汝はあの女に未練があるのかいと俺の眼が剃刀の下からにつと笑

一生の戀だ、命かけての愛だの信實だのと云つた蜜の如ないつかの抱擁も千言萬句の誓ひも歡語も、但しは狂ひに狂つた欲念の焰も、ただ一息に押しこかしてゆく「時」の力の前には何等の矜持も權威もあつたもの

では無い。時は過ぎてゆく、而して凡てが何時となく傳奇的な美しい幻想の色彩の中に掻き消されて了ふ……

ほつと吐息をして眼を瞑る、剃刀が頬邊に冷やりと這る……怪しい罪惡の秘密と淫蕩な官能の記憶とが犇々と俺の胸を掻き捲る……

も一度逢ひ度い……ハツとして眼を開けた、嘲笑ふやうに鶏頭が光る。

ほんとにあの鶏頭のやうな女だつた、お跳さんで嘔吐きで伶俐で愚かで虚榮家で氣狂で而して恐ろしい惡魔のやうな魅力と美しい姿……

凡てが俺の藝術欲を嗾かし瞞らかし、引きずり廻すには充分の不可思議性を秘して居た、縦へ、それが代々木の草原を飛びあるく白栗鼠の兒のやうに或は陋しく或は輕浮であらうとも俺にはまた却てその無邪氣と痴態とが萎らしくも亦憫らしく思はれたのだつた……そればかりか俺も亦釣られて栗鼠のやうに飛びあるいた……而して遂ひには二人とも監獄に墮ちて了つた……兎に角……と又右の眼が熟と靈魂に喰ひ入るやうに覗き込む……汝達はあまりに夢想家だつた、殊に汝は現實そのものの生活をあまりに藝術に爲過ぎた……さうだ、それに違ひない

悲しい左の眼がうなづく……汝が今日のやうな慘めな世間の侮蔑と壓迫を蒙るのも當然だ、道ならぬ戀は一度は破滅する、美しい幻影も遂には破れる……さうだもう幻滅だと又左の眼が切なさうに差し覗く……初めそれほごにもなかつた汝が奈何して又あんなに急に夢中になつて了つたのだ、と右の眼が剃刀の下から嘲るやうに喰ひ入つてくる……それは俺にも解らない、只俺の藝術至上主義が俺自身を妖艶な蠢惑と幻感の世界に昏睡させて了つたのだ、罪惡がそこで醸された、つくづく俺は俺の魔法の空恐しさを知つた、而して女の美しさを……啜り泣くやう

に左の眼が光る。……誇張してはいけない、一體どちらが悪者なのだ、世間では汝の方が正直過ぎた、畢竟擬寶玉を買被り過ぎた、もつと薄情におひやかして逃げて了へば何でも無かつたと云つてゐる。……有難う、警察でも監獄でもさう訊かれた、一體汝達はどちらから先に手を出したのだと、……双方の眼が一時に苦笑する……さういふ上品な世の中だ、疑はる可くして初め疑はれ、待ち設けた最後の罠に墮つ可くして的確に二人とも墮ちた、而して結末も至極簡単に解決した、それで可い、それで可い、二人のやうな罪囚の痴態はただ美しい傳説の中にのみ

生甲斐がある。もう何事も訊いて呉れるな、……フフン、それではこれ位に切り上げやう、何れにしても汝は莫迦だ、飛んでもない阿呆だ、罪人だ、氣狂だ……さうだそれに違ひないと兩の眼がじつとうなづく……カラカラチーン、チーン、チーン、チーン……氣まぐれな隣の自鳴鐘がもう夜の十時を點つ、夕日がくわつと壁から鏡に照り反す。鶏頭が恍惚と息をつく、風が光る。

「そばからくと起る残念な事、口惜しい事、迫害、いろくの事情

にせめられて平常からきかぬ氣の私はとりつめました、自殺と覺悟をきめました、然しここで死ぬのはいや、今一度お目にかかり度い〜……はつとして後を振り向いた、誰もゐないガラんとした部屋の天井にただ手水鉢の水が斜めに水陽炎を投げてゐるばかり、ちらちら動く、光る、影と影とが逃げてゆく、追ひ廻す……

また向き直ると晝の恐怖が寂として後からそつと髪の毛を引つ張る。「あなた此まま私を放つてお置きになるのですか、純様、ああ純様、戀しき戀しき純様、はやくはやく私を助けて下さい、逃げて下さい、苦

しい残念、口惜しい、只一人の姉の同情で——いづれ〜私逃げ出します、近いうちにさうして自殺します。」

狂氣のやうな女の姿が眼に見える、俺もあの時は夢中だつた。苦しかつた。而して机の上にあつた眞赤な眼無達磨を思はず抓みつぶして硝子に擲きつけた、また飛びついて小刀でグザとその白眼玉を刺し通した。さうだ、さうだつたに違ひない。

「私は覺悟致しました、決して〜あなたまで死んで下さいとは申しません、死んでもいい、どうぞ私を引き出して下さい〜。」

追っかけてまた手紙が来る、俺も火のつくやうに旅行支度をする、それでも待てないであのお跳ねさんは到頭身體がもう變だ、見るものも見なくなつたと云つて寄越した、かと思ふとその手紙より先きに大和の笠置から鵲の立つやうに飛んで來た。

南無三！……思ひ出しても身體が顫へる……そこにもうちやんと恐ろしい畏が二人を待つて居たのだ、それから俺達は飛んでもないところへ旅行して了つた。

嘔吐き、嘔吐き、眞赤な嘔吐き、俺は何もかも知つて居る、私に切迫

詰らして愈心中させる氣だつたか、それとも淫蕩な夏の旅行に私を誘き寄せやうとしたのかを、ごつちみち二つに一つだ。俺にしるもうあの時はあの女を思ふさま淫逸な欲念と熾烈な死と官能の幻惑の中に引きずり廻すより外に途が無いと思つたのだ。

ほつと眼を瞑る、

「私はあなたが憎らしい、あなたは私を世の中から、凡ての人から見はなさせて一人ぼつちになつた後、いぢめていぢめてつき放さうとなさるに違ひありません、口惜しい、入らつしやい、ここへあの思ふ存分い

まだまだあの女將^{おかみ}はやつてゐる。キリキリと砥石^{ひごり}に一當^ひあてて、じつと聴くともなく刃^はを返すとホロリと涙が落ちた。

弱蟲……苦痛と凌辱との思ひ出が切々と蘇る。未決監を出てからもう彼是一と月、その間、日となく夜となく緊張し切つた俺の神経はまるで蠱斯^{きりぎりす}のやうに間斷もなく顫へ續けた。狂氣と錯亂とがもう俺の目前に赤く笑つてゐる。さもなくとも俺は短命だ、ただ一息に俺は俺の息の根を吹き續けるより外に仕方がない。

Gen-gen, byō-soku-byō…… Gen-gen, byō-soku-byō……

苦しい、苦しい、奈何^{さう}かしてくれ、真赤な地獄繪の映畫^{フィルム}がキラキラキラキラ俺の後腦に烙きつく。ふさぎの蟲がしくしく募る。

ワンヅワースの牢獄に初めて謙虚な悲念に搔き暮れ得た驕慢な天才兒の末路は汝^{おまへ}にいい訓戒だ。

さりながらあの市ヶ谷の監獄生活は誠に貴い省察と靜思との時間^{おまへ}を汝^{おまへ}に與へたと、鏡の中から悲しげな兩の瞳が熟視^みめる……

あれから苛酷な世の嘲笑と壓迫は日夜續いた、それでも汝^{おまへ}は能く耐え

た、と又剃刀が冷たい辻りを額に續ける……

鶏頭、鶏頭、記憶は悲哀を再燃させる。汝が初めて町の安床に行つた時……と又眼が憎さげに顫へる……がらがらと驅けて通つた囚人馬車がまるで汝の頭を轢き潰して鏡一面に黄色く光つて行つた時、あの狎のやうな下司ばつた顔の親方が何と云つた。

「囚人馬車の癖に宮様のやうに威張りかへつてのさばりやがる……一體あんなに幾人乗つてやがるんだらう……あんな罪人なんて奴は何だね樺太三界にでも追放つちまつた方がいいんだ、ねえ旦那。」

その時の汝の顔つたら無かつたせ、ごうせ監獄の御用馬車だ、お客さんはせいせい十人か十一人に極つてゐる、さうだあんな罪人は樺太にでも追放したがいい」汝は顔を眞蒼にして顫へたつけね、それからその翌日は……と又剃刀が眼と眼との間に顫へる……寄席の鈴本で、あの眼のクルクルと大きい厭味な洋服姿の秋月の奴が現在汝のゐる前であのキザな十題話の落しに面白をかしく間男の意見をして見せた。あの時傍に小さくなつて居た弟が、あの内氣な弟が顔を眞赤にして兄さん兄さんと汝の袖を曳いた。心配するな、俺はもう何と云はれたつて姦通者に相

違ないのだ、皆が皆寄つて群つて苛めるならもつと苛めろ、もつと苛めろ、一層の事ぐいと銀の槍でも突き通せ。汝の心はもうその時犇と優しう Tinka John の身體を抱き擁めてゐたつけね。又その翌日は……思ひ出しても厭やな暑い日だつた……苦しき紛れに飛び込んだあの汚い八丁堀の大路次亭では見るからに貧乏臭い瘦せぎすの講釋師が頓狂に顔を顰め乍ら張扇をペタペタと叩いてゐた。而してまた汝の面前でヤンヤと人を笑はせた、……さうだ俺はよく知つてゐる、だらしなく晝寢してゐた爺までが齒の無いモガモガの口をあけてフナフナと笑ひ轉けたあの

時だ……「へえい、小櫻さんの花魁、ええ、あの花魁は」と頭を搔いて番頭が「實はなんでダス、恰度昨日で年が明けましてな、それで店の吉さんと一緒に國へとか申しましてついさきはご立つて行つたばかりで、へい。」ナニ、國へ歸つた、國、國とは一體何處だア。「へえ、吉さんの故郷とかで。」吉の故郷は何處だア。「と黄色い聲をして、金を貢いで舉句のはてに欺された旗本の野呂馬息子が齒齧みをする。」筑後の柳河ださうで。「筑後の柳河ア。」口惜しさうに聲が泣き出す。「へえ、大分遠方で、何でも長崎の傍ださうで、えつへつへ。」さうだ、如何にも俺の故郷は筑後の柳河

だ、それがどうした。笑ふにも笑はれない、何といふ惨めさだ。汝は思はず敷島の袋をぐいぐい掴みつぶして了つたつけね。

Gen-gen, byō-soku-byō……Gen-gen, byō-soku-byō……お岩稻荷大明神様……どうぞ御願ひ奉る……

喧ましい、鶏頭、鶏頭、俺の肝の蟲がもう弾ちぎれさうだ。

暑い、暑い、くつわ蟲が啼く、蝸が啼く、くわつと外光が眼ににじむ、陰氣な鶏頭がまた眞赤に心のごん底から笑ひ出す。それだのに何とした

か意久地なしの靈魂がまたトスカ的に滅入り込む、氣が悄氣る。ポロポロと涙が零れる。

不圖眼を落すと、鏡臺の上に空になつた香水の壇が載つて居る、その白いレツテルの腹の上に又小さな一寸蠟燭を立ててある。家内の Tinka Ongo でもやつた事だらう、面白い、と一寸妹に感心する、而して又物好きなきな心はその寂しい心の尖にしんみりとマツチを擦りつける、と晝の燭が微かに燃える。鏡の面を少し立てるとその中に聲もなく燭が吸ひ込ま

れる。而して眞晝間だのに俺の心の心が幽かに泣き初める。

汝は我儘だつた、而してあまりに藝術上の趣味なり嗜好なりに贅澤過ぎた。譬へ天真の稚氣と信實とが絶えず心の底に晝の蠟燭の様にとろろめいてゐたにもせよ、馴れ過ぎた天の恩籠と世の淺はかな賞讃とが何時しか汝の貴重な靈性を盲目にした。怪しい感覺と不可思議な官能の幻感が又汝の肉體を思ふさま翻弄した。

汝は家庭に於ても一種の暴君であつた。それかと云つて汝ほどあの寂しい人々の間から尊敬と愛慕と信賴とを集め得たものはない、汝は七情

の赴く儘に色を換ゆる無邪氣な光のかめれおんであつた。然しまた豹のやうな空恐ろしい愛情の殘虐をも敢てした、また怪しい魔法使ひの鞭のやうに凡ての肩の上に柔にその恐怖と愛憎の吐息とを投げかけた。汝はいかにも優しかつた、温かであつた、然し又氣まぐれで、神經質で、能く怒り、能く苦しんだ。例へばその時折の衣服の調色、ある日の汗の臭などの些細の感覺の不愉快から終日母の傍に坐る事さへ苦痛にしたほど我儘で又驕奢であつた。

然し汝が一日家に居ないと家中の者は皆陰氣な尊榮のそばからふいと

温かな麝香猫でも居なくなつたかのやうに何時も妙に滅入つて了ふのが眼に見える。現在汝の弟は汝の藝術の第一の崇拜者ではないか、剩へ汝の婆やなどはまるで汝一人を神様か活佛のやうに頼り絶つて居る。實際、かういふ滑稽な盲信位難有迷惑な事はない。だがよしや汝が世間から棄てられ笑はれ嘲られても汝の肉親の凡ては汝に縦いてゆく、而して善かれ悪かれ汝の爲る事には頭から信じ切つて居る。

何が佛だ、思はず手に持つた剃刀を向ふの壁に投げつけた。キリキリ突き立つてピヤンと跳ね返る。

印度の佛と能くあの若い獨逸の畫家に戯けた手付で例も皮肉な禮拜を受けさせられた熱帯系の菩薩面がニコリともせず鏡の中で顫へてゐる。厚い唇が今日は不思議に眞赤に見える。晝の蠟燭が鼻の眞向にしんみりと光り輝く、眼と眼とが凝とそその底から吸ひ付くやうに差覗く……つくづくと陰影と靈魂と睨み會つたまま底の底から自愛と憐憫の心が切々と滲み出る。「ほんとに瘦せた。」ほつと吐息をしてまた俺の氣分もあれから随分變つたものだと思ふ、ごんな苦痛と羞辱とに身を鞭れ曝されても持て生れたデリケエトな誰にも懐かしがられるあの貴い心持丈は少

しも傷けないで居られたと自負する心の裏から、流石に險しくなつた額付や皮肉な口元の痙攣さへ目につく。

ちつとこみあげてくる哀傷の一念を抑えて、剃り立ての眞蒼な面の光澤を冷々と勞ると、暑い夏の日にもしんみりと靈魂の冷たさが身に染みる。

全く誇張された同情や信頼や愛情の過剰な負債には堪へられない、堪へられないばかりか或時は寧ろ嫌悪と反感と冷酷な肉親の呑嚼をさへ感せしめる。ごうかして切り抜きたい、獨になりたい、そればかりに俺

は思はず血で血を洗ふやうな殘虐な暴君にもなつた、罪人にもなつた、親不孝者にもなつた。かと云つて俺は俺の貴い靈魂をこれ以上に自ら侮蔑し傷け墮落させる事は出来ない、剩へ俺の肉體を血まみれに刺し貫いて俺自ら陋しい賤民の死體のやうに大道の眞中に放棄り放す譯にはゆかない。俺は俺自身が愛惜い、命が惜しい、死に度くない、況して嘘か眞實か第三者の中傷か、いざとなつたら二人のごちらが罪が重くなるだらうと一時はわなわな顫へたといふ、あの輕薄なお跳ねさんなんぞと一緒に死んでごうなる――

俺が自殺したら無論肉親の一人二人は墓場迄も縦いて來るだらう——これは偽りでない——而してあの女でもひよつとかしたらあの可愛い小さな心臓を今度は戯談でなしにキュツとピンの尖きで突き刺して笑つて眠て了ふかもわからない。然し俺は心中は御免だ——獨で死ぬのももう厭になつた。たつた一人で生き度い、命が惜しい。

それはいつぞやは死なうとも思つた、俺の好きな植物園の藥草花壇で、毒藥を喫んで、あの大蒜にんにくの根や、茴香の蕾を掴み散らして、精一杯に苦んで、藻掻いて血を吐いて、而して笑つて眞蒼に腐つて了ひ度い——と

も思つた。然し母迄がおせつかひにも一緒に自殺でも爲さうな氣振に見えたので、急に俺は不愉快になつて、その足で淺草の活動寫眞見に飛んで行つて了つた。

毒藥と云へばあの俺がある種類の豫防しほに納つて置いたあの甘汞を、何と間違へたか、蒼くなつて慌てて秘かくして了つた俺の弟はほんとに可哀い道化ものだ。

鶏頭、鶏頭、俺の弟はほんとに可哀い道化ものだ。

時が経つ……蠟燭の火がちちと幽かに瞬く。

鶏頭、鶏頭、

記憶に悲哀は再燃する、切迫詰つた俺の感覚が四ん匍ひになつて剃刀を拾ひかける、ハツと靈魂が後から呼び返すと意久地もなくパタリと身體が平べつたくなる、苦しい涙がポトリポトリと額を抑えた手の甲に零れる……

轡蟲が啼く……唐突に座り直して、ぐいと右の指を二三本白粉の瓶

に突つ込む。ぐるぐると掻き廻してべたりと面にぶつつける、……ふさぎの蟲がクスクス笑ふ……狂者、狂者、狂者、まるで汝は狂者だ、慙うして居る中にも頓狂な発作の陰謀が恐ろしい心のどん底から可笑しいほごはしやぎ出す、白粉を水にも溶かさないでべたべた塗りつける、にどこにこそ面が突張る、眼が光る、見る見る能のお面のやうに眞白に生色のない泣つ面が出来上る。さうでもないか、此奴、解剖學の標本室で見た死刑囚の白い面型その儘だ、さうだあの面型には眉の毛が二三本赤つちやけてくつついて居たつけない——ここまで揶揄つて來て俺ははつと思つた、

能い加減に巫山戯け散らしてゐた靈魂がピタと緊張ひきしまる。眼が黒く光り出す、急に恐ろしくなつて粉紅こなべにの圓い球をぐいと右の頬邊ほつべたににじりつける、と紅い日の丸の烙印が如何にも道化らしくバツと燃え出す、面白い、左へもひとつべたりとにじりつける、あはは、泣つ面つらがやつと笑ひ出した。立派な戯奴ヂヤウカアだ、これでひとつ浮かれて退けるか。

活惚カッボレ、活惚カッボレ、何處かでまだ三味線を弾いてゐる。ついと立つて紅い道化頭巾を冠る、浴衣を脱ぐ、薄いシャツ一枚になつて、さて眉まゆから鼻、口元と白粉を均ならす、長い臉毛まつげの周圍まわりを青インキで濃く隈くまをつける。

隈くまと云へば未決監では面白かつたな、とクスクス皮肉な笑が咽喉のどのぐりぐりにこみ上げる。ねえ汝おまへは贅澤ぜいさくだつたよ、牢屋に居ながら三度三度、スープに洋食を三品宛、それに果實は缺かしつこなし、あまり辛氣からなので食べ残しの水蜜桃で眞紅な自畫像をぬたくりつけてひごく吐つられたつけな、あの挿話エピソードは誰に聞かしたつて腹を擁かかえるだらう、この惡戯者いたづらものはその翌日看守長から鹿爪しかづめらしく呼び出された、それはかうだ。「三八七番、この眞紅まつかな面つらは何だ。」それは私の顔で御座います。「何で描いた。」「水蜜桃の腐れたので描きました。」「ぢやあこの黄色いのは何を用つかつた。」俺は

髪かみの毛けをもじやもじやと眞黄色まがねいろになすりつけたのだ。「それはバタで。」
 「このボチボチ點々ぼちぼちは何だ。」それは辛から子しで御座ございます。「青あおい眼まなこ玉たまはごうした。」
 俺おれはつくづく苦笑くわうしやくした。「それはサヲダしらを絞しぼりましたので。」一帖いっしやくの半紙はんしを
 一枚まい翻めくると矢やつ張はり下したにも俺おれの眞紅まがねな顔かほが泣なつ面おもてをしてゐる。また翻めくる
 と矢張またり黄色きいろく滲しみみ込こんでゐる。また一枚まいまた一枚まい、矢やつ張はり青あおい眼まなこ玉たま
 が光あかりつてゐる。俺おれははらはらしながら自分の面おもての皮かわでも一枚まい一枚まいひん翻めく
 られるやうに辛からかつた……
 ぶつと吹き出して立ち上ると、活惚かふく、活惚かふく、三味線さんまいせんが調子てうしをつける。

Gen-gen byō-soku-byō…… Gen-gen byō-soku-byō…… お岩おいわ稻いな荷な大明だいめい
 神様かみさま……南無妙法蓮華經なんぶみょうほうれんげきやう……ごうぞ商賣しょうばい繁昌はんしやう致ちしまするやうに……
 鷄頭けいとう、鷄頭けいとう、俺おれはもう氣きが狂くるひさうだ。

活惚かふく、活惚かふく、甘茶あまぢやで活惚かふく、鹽茶しほぢやで活惚かふく、ヨイトナ、ヨイ、ヨイ、……
 くるくると二つばかりとんばがへりをする。ガランとした部屋へやの中に、
 たつた一人、眞白ましろな面おもてを緊張ひきしめてくるくるともんどりうつ凄せさ、可笑わかしさ、
 又その心細こころこまさ、くるくると戯あそけ廻まわつて居ゐる内に生眞面目なまじめな心こころが益落えきらくちつ

いて、凄まじい書間の恐怖が腋の下から、咽喉から、臍から、素股から、足の爪先から、空一面に擴がり出す。

鶏頭が眞赤に眞赤にひつくりかへる。

頭の映畫フィルムがキラキラキラひつくりかへる、蝸かなくが鳴く、お百度參りが泣く、三味線が噓し立てる。

活惚、活惚……

三味線がハタと止む……

と、くるくると轉ころがつてゐる俺自身ごころが俺にももう恐ろしくて恐ろしくてたまらなくなつた、思はず投げつけられた盜賊猫ざうぼくねこのやうにぼんと起き直るとその儘バタバタと二階に駈け上つた。

晝の蠟燭がまた幽かに取澄まして瞬く。

それから暫時しばらく経つて、殆素つ裸の俄作りの戲奴ゲイウカアは外の出窓に兩脚を恍惚ごうと投げ出して居た。而して今靈岸島の屋根瓦の波の上にくるくると落ちかかる眞赤な太陽の光を凝ちやうと眺めて居る。雲の影ひとつ見えない大空

の果に鳩が火の玉のやうに飛んで居る。煙突の煤烟がくさくさと渦を巻く、電線が光る。

それでも、向ふの土藏の屋根の上に枯れかかった名も知れぬ雑草がしんみりと戦ぐでもなく戦いでゐるのが眼に付いた、その僅な二三本しかない幽かな草の戦ぎがちつと熟視めて居るうちに、先程の活惚騒ぎで取り落したふさぎの蟲をまた染々とぶりかへす。草が戦ぐ、また意久地なしの靈魂が滅入つて了ふ。悄氣る、鬱ぐ………涙がホロホロと頬つぺたを流れる。

㍻ Gen-gen, byō-soku-byō……Gen-gen, byō-soku-byō……

急に寂しくなつて、まじまじと下を向く、とまた生憎な、目に入るでもなく庭の垣根越しに向ふの長屋の明け放した下座敷が見える。

おや、もう電燈が點いて居る。晝間の光に薄黄色い火の線と白い陶器の笠とが充分にダラリと延ばした紐の下で、疊とすれすれにブランコのやうに部屋中揺れ廻つて居る、地震かしらと思ふ内に赤坊が裸で匍ひ出して来た、お内儀さんが大きなお尻だけ見せて、彼方向いて事もあらうに座敷の中でバツと紺蛇目傘を擴げる。かと思ふと何時の間に歸つて来た

のか末の弟が廁の中から博多節か何か歌つて居る。

變だ、何だか何處かで火事でも燃え出しさうだ、空が焼ける、子供が騒ぐ、遠くの遠くで音も立てずに半鐘が鳴る……をや、俺の脳髓までが黄くさくなつて來たやうだぞ……犬までが吠え出した……何か起るに相違ない。

南無妙法蓮華經……お岩稻荷大明神様……

苦しい、苦しい、汗が流れる。

恰度こんな暑い日だつた、俺は監獄で……と戯奴が面を擡める……俺は監獄であまり監房の臭氣が陰氣なので、汚ない亞鉛の金盃に水を入れて、あの安石鹼を溶しては両手で掻き立て掻き立て、強い弾ぢきれさうな匂を息の苦しくなるほど跳ね散らしてゐた。

眞白い細かな泡と泡とが、緑に、青に、紅に、薄黄に、紫に、初めは紫陽花、終まひには、小さな寶玉に分解して數限りもなく夏の暑熱と日光とに光る、呟やく、泣く、笑ふ、嘲る……恍惚と見入つて居ると、コツコツと隣の厚い壁板を向ふで敲く。そこで、俺も泡まみれの手でコ

ツコツと合圖をして「奈何したの。」と腰をかかめる。

「今日は盆の十六日ですわねえ。」と氣のない疲れた聲が投げ出すやうにきこえる。

「さうだ、盆の十六日。」と俺も一寸可笑しくなる。

「もうつくづく厭になつちやつた、ああああ……」

これがこの二月に淺草で友達を殺した男の聲かと思ふと、何となく變な、不憫な、厭あな氣がする。二月から入監つて、まだ一度か二度法廷に引つ張り出されたつきり、まだ刑も極らず、放たらかしにされて居る

のである。飽き飽きするのも無理もない。

暫時黙つて居ると、またコツコツと甘へるやうに背後を敲く。

「何だね。」

「あの罨丸抓んだら死ぬんでせうか。」

不意に俺の眼が笑ひ出した。

「そりやあね、ギユツと抓んだら何時でも死にます。」と口を寄せて、また物好きな道化心が笑ひ出す。

「だが、一體誰が抓むの誰の罨丸を。」

「私が抓あつしむんですがね。」

猫のやうに頓狂な聲がした。

と、思ひ出すと、取り澄ました俄作りの戯奴ヂヤオカアが一時に眞白な顔の造作を破裂させた、はははは、自分でも吃驚ひつくりするほどの大きな聲を擧げ乍ら、腹を擁ようえて出窓から畳の上に轉げ廻つた、而して又轉げ廻つてくゝ世界中がひつくりかへるやうに笑ひ續けた。

はははははは………

はははははは………

桐の花目次

歌

銀笛哀慕調

I	春	………	二七
II	夏	………	五一
III	秋	………	六三

IV 冬.....六七

初夏晚春

I 公園のひこごき.....七五

II 郊外.....八一

III 庭園の食卓.....八五

VI 春の名残.....九五

薄明の時

I 放埒.....一二五

雨のあごさき

II 踊子.....一三九

III 浅き浮名.....一四五

VI 蟾蜍の時.....一五三

V 猫と河豚と.....一五九

VI 路上.....一六五

I 雨のあごさき.....一七七

II 晝の鈴蟲.....一九五

秋思五章

I 秋のおさづれ……………二〇七

II 秋思……………二一三

III 清元……………二一九

VI 百舌の高音……………二二五

V 街の晩秋……………二二三

春を待つ間

I 冬のさきがけ……………二六一

白き露臺

II 戯奴……………二六九

III 雪……………二七三

IV 早春……………二八五

V 寂しきごち……………二九五

I 春愁……………三〇五

II 夜を待つ人……………三一五

III なまけもの……………三二三

IV 女友ごち……………三二九

v 白き露臺……………三三七

哀傷篇

I 哀傷篇序歌……………三六一
 II 哀傷篇……………三六七
 III 續哀傷篇……………三九五
 IV 哀傷終篇……………四一一

小品

桐の花とカステラ……………七
 晝の思……………一〇一
 植物園小品……………一四一
 感覺の小函……………三四七
 白猫……………四三五
 ふさぎの蟲……………四四九

挿繪

屏繪

桐の花とカステラ 七
 たんぼぼ 二五
 葱と紫蘇 六九
 螢 一〇一
 道成寺 一二三
 銀座 一七五
 上海 一九七

欄書

ココア外二十種

泪芙藍と磁石 二四一
 雪 二五九
 白き露臺 三〇三
 露のおきふし 三四七
 鳳仙花 三五九
 白猫 四二五
 晝の三味線 四四九

集のをはりに

數少きわが歌の中より、選びて僅に四百餘首を得たり。わが歌はかの銀笛哀慕調のいにしへより哀傷篇四章の近什にいたるまで、凡ては果敢なき折ふしのありのすさびなれども、今に及びては舊歡なかなかに忘れがたし、ただ輯めて懐かしく、顧みて哀愁さらに深し。

處々に挿みたる小品六篇のうち、「桐の花とカステラ」「晝の思」の二評論は時折のわが歌に於ける哀れなる心ばえのほごを述べたれども、そはわが今のつきつめたる心には協はず、ただ詩のみ餘情のみ、うはかはのただひさふれのみ。

わが世は凡て汚されたり、わが夢は凡て滅びむさす。わがわかき日も哀樂も途には臯月の薄紫の桐の花の如くにや消えはつべき。

わがかなしみを知る人にわれはただわが温情のかぎりを投げかけむかな、囚人 Tonka John は既に傷つきたる心の旅びとなり。

この集世に出づる日ありとも何にかせむ。慰めがたき巡禮のそのゆく道のはるけさよ。

この心を誰か悲しく弄ばむやんごともなし
やんごともなし

一九一二、初冬

著者

桐の花をばり

大正二年一月二十二日印刷
大正二年一月二十五日發行

正價金壹圓

著者 北原白秋

發行者 西村寅次郎
京橋區南傳馬町三丁目十番地

印刷者 佐藤保太郎
京橋區新榮町一丁目二十一番地

版權
所有

發行所

東雲堂書店

東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地
電話京橋一六三九番振替五六一四番



